

採 蓮

Siren

第十五号

No.15

目次

Contents

採蓮のいわれ 4

The Implication of "Siren" 5

溪斎英泉の画業展開について 田辺昌子 7
The Development of Keisai Eisen the Artist Masako Tanabe 22

事業報告 所蔵品データベースを使った鑑賞授業の試み 山根佳奈 23
Project Report: An Experiment in Teaching Visual Appreciation through the Use of an Art Museum's Collection Database Kana Yamane 34

平成二三年度 千葉市美術館の活動 35
Fiscal Heisei 23 Activities of Chiba City Museum of Art

採蓮のいわれ

蓮は古来の画題でありそれを描いた名画が多い。その花は清浄無垢、また枯れては寂寥の情をもたらす。

千葉は古代蓮の種が発掘され現代に命を復活した町であり、奇しくも千葉市美術館は古には蓮池（はずいけ）と呼ばれ蓮の漂う池を埋立てたといういわれの繁華街に位置する。音通する *sound* は美声をして船乗りを誘惑し難破させるギリシャ神話の海の精である。蓮を採るが如く古今の美を紡ぎ、妖精の如く人を魅惑する芸術に就いて論ずべく本誌の題を定めた。

千葉市美術館

The Implication of “Siren”

The lotus has been the theme of painting, and there many master works which delineate it. Its flower is pure and innocent, and gives the feeling of loneliness and silence after it is withered. Chiba is where ancient lotus was discovered and its life was reinstated. Coincidentally, the Chiba City Museum of Art is located on a street made by reclaiming the lotus field called Lotus Pond (Hasu-ike) in ancient times. *Siren* has same phonetic expression as Siren in Greek mythology who lured mariners to their destruction. The name of the bulletin was decided with the intention to weave the beauties of both present and ancient times as if harvesting the lotus and to discuss the arts which lure us like a siren.

Chiba City Museum of Art

溪斎英泉の画業展開について

田 辺 昌 子

はじめに

千葉市美術館には、今中宏氏〔註〕のコレクションを中心に、溪斎英泉（一七九一～一八四八）の作品が三百点近く収蔵されている。英泉は、文化（一八〇四～一八）後期から五十八歳で没する嘉永元年（一八四八）まで活躍した幕末期の浮世絵師であり、時に凄絶とも頹廢的とも形容されてきた美人画様式は特に印象的であり、これまで英泉といえば展覧会や美術書においても美人画が中心に語られてきた。また今中氏の私家版『英泉著画作目録』（龍亭文庫 一九五六年）や、おおさわまこと氏の大著『溪斎英泉』（郁芸社 一九七六年）においては、特に膨大な英泉の著画作の版本研究が充実し、さらにおおさわ氏は波瀾万丈の生涯についても丹念に論じている。

しかし版本での活躍は右記のような研究からほぼ全貌が理解されるとしても、錦絵では、英泉の主要な美人画のほとんどが、画業の前半期にあたる文政期（一八一八～三〇）に集中して後半期の活躍が見え難いこと、また美人画以外の分野での作品も多様で見落とせない面のあることから、画業展開の全体像を把握する必要性も感じられる。

本論は、先学の研究に、千葉市美術館の企画展「浮世絵師 溪斎英泉」展（二〇一二年五月二十九日から七月八日）をきっかけに、あらたに知り得た情報を加え、英泉の錦絵を中心にその画業展開を概観しようとするものである。

一、初期の英泉作品―文化末～文政初期の錦絵を中心に―

初期の作品については、松井英男氏による「溪斎英泉初期作品群の研究」（『没後150年記念 溪斎英泉展』太田記念美術館 一九九七年）があり、改印、署名書体、芝居の考証、吉原細見などを用いた実証的な内容で、その活躍の様子が伝えられている。さらに『浮世絵師 溪斎英泉』展図録（二〇一二年 千葉市美術館）での指摘を加え、初期の英泉作品を主題ジャンルに分けて述べると、次のように概観されるであろう。

（1）美人画

文化七年（一八一〇）頃、英泉は菊川英山（一七八七～一八六七）の父英二宅に寄寓する。英山は、寛政期（一七八九～一八〇二）を中心に活躍した高名な絵師喜多川歌麿（？～一八〇六）亡き後、文化期（一八〇四～一八）美人画界の第一人者であり、当然ながら英泉初期の美人画には英山様式が濃厚である。

現在確認される中では、「白酒売」と「文売」の二図が知られている大判錦絵の「風流花合」〔図1〕のシリーズが最も早い作例である。「文売」の方には、「菊川英泉筆」という初期の珍しい署名があり、改印「極」と名主印「森治」の組合せからおおよそ文化末期の作と推定されていたが、さらに浅野秀剛氏により、上部のこま絵に描かれた「文売」の四代目瀬川路考が文化九年（一八一二）十一月に亡くなることなどから、文化九年（一八一二）頃の作と考証さ

図1 溪斎英泉「風流花合 白酒売」 大判錦絵 文化九年
(二八二二頃 メイテレ(名古屋テレビ放送)蔵)



英泉筆

図2 菊川英山「妹背中台鏡」 大判錦絵
文化二八〇四一八後期



図3 溪斎英泉「華姿あふぎ合」 傘差す美人 大判錦絵
文政二八一八三〇初期 千葉市美術館蔵



英泉筆

図4 溪斎英泉 横笛吹く若衆(やつし牛若丸) 大判錦絵
縦二枚統掛物絵 文政二八一八三〇初期
千葉市美術館蔵



英泉筆

図5 溪斎英泉 舟中の男女 大判錦絵
文政二八一八三〇前期 千葉市美術館蔵



十二巻内
英泉筆

図6 溪斎英泉「江戸名所十景 両国の納涼」 小判錦絵
文化二八〇四一八末期—文政二八一八三〇
初期 千葉市美術館蔵



英泉筆

れている【註2】。役者似顔がこま絵に示されているという形式は、英山による同時期の「妹背中合鏡」【図2】でも同様の趣向があるが、美人は全身像で描かれている。「風流花合」のような美人大首絵は初期の英泉にとつてはむしろ稀なスタイルで、英山と同様に、このような大首絵にはまだわずかに歌麿の様式も残されているように思える。

この時期の作例として多いのは、体つきも華奢で、生活臭を廃した人形のような美しさを持つ英山風美人の全身像である。署名がなければ英山の作品と見まがうような画風で、「青楼四季之姿会」、「華姿あぶぎ合」【図3】など、五十点余の作品が確認されている。中には「両国夕涼之図」といった大判錦絵三枚続の作品もあり、美人画の分野においては新人の割に評価が高く、恵まれた仕事をしていた様子がうかがえる。実際には四歳しか年が離れていない英山の片腕ともいえる立場で、すでに一人前と認められる扱いを受けて多くの注文に応じていたのであろう。

すなわち英山が人気を得ていた範囲での活躍が中心であつたわけで、大判錦絵を豎に二枚継いだ掛物絵においても同様に、早い時期から英泉の活躍が認められる。「横笛吹く若衆」【図4】はその一例で、簡易に表装された状態が残されており、気軽な掛物として、一般家庭で楽しまれていたらしい。また本図は、横笛を吹く姿、振袖に表された源氏の笹竜胆の紋、刀を差していることから、『十二段草子』として知られる牛若丸を当世風俗の若衆(色子)に置き換えたやつし絵であることがわかる。このような古典を題材としたやつし絵は、錦絵では英泉初期の掛物絵や柱絵に限って認められる主題傾向である。

なお従来の指摘にもあるように、文化末期から文政初期の美人画の署名は「英泉筆」(後年は「英泉画」とすることが多い)が主で、「英」の下の部分が「大」のようになっていく(後年は「ハ」のように離れていく)字幅のやや細い書体が基準的である。

(あぶな絵と春画)

やはり英山人気の一翼を担う絵師としての位置づけは、親密な男女の姿を描いたあぶな絵および春画の分野でも基本的に同様であり、早々に見応えのある作品が出されている。「舟中の男女」【図5】は、そのようなあぶな絵のうちの一回で、画中の布団に付けた札に「十二番ノ内 泉丸」とあることから、十二枚揃の最終図にあたると目される。艶かしく情感のこもったこのシリーズは、店表で売られていた一般の錦絵商品より濃厚な色彩で、やや上質に仕上げられた版のようである。

文化十四年(二八一七)の『美多礼嘉見』【註3】など、春画に関しては版本における出版が目立っている。また小さいサイズの春画の摺物で初期の英泉筆と思われる作品は相当多くあるようである【註4】、小さい画面の中に親密な男女の姿を描いた「(鏡の中の男女)」なども、そのような春画摺物の一部であつた可能性がある。

肉筆画では展覧会に出品された「十二月風俗画帖」(個人蔵)と仮に呼ぶ春画帖が興味深い。落款はないが、画中に○に「泉」の英泉マークがある図が含まれていることや画風から、英泉筆と比定される作品で、非常に緻密で丁寧な描写に終始した大型の画帖であり、相当に裕福な人物からの注文品であつたことが想像される。面白いのは、十二図のうち、葛飾北斎または北斎派の作とされる文化九年(二八一二)頃の錦絵春画帖「絵本つひの雛形」の中から四図、また英山の錦絵春画シリーズ【註5】から三図の図柄を借用していることである。図柄と共に画風が北斎様式と英山様式それぞれに振れて表れ、英山ばかりでなく北斎に倣う様子が認められることでも興味深い。

(2) 風景画

風景画では唯一「江戸名所十景」のシリーズにおいて、初期の美人画でしばしば用いられた「英泉筆」の署名が認められる。確認されるのは三図のみであ



図8 溪斎英泉「渡辺ノ綱」大判錦絵
文政(1818-30)前期 千葉市美術館蔵

溪斎英泉画



図7 溪斎英泉「新版 浮絵五百羅漢之図」大判錦絵
文政(1818-30)初期 千葉市美術館蔵

英泉画



図10 溪斎英泉「声色好」九つ切判摺物 文化13年(1816)か
町田市立国際版画美術館蔵

英泉画



図9 溪斎英泉 七代目市川團十郎の漁師ふか七実は金輪五郎今国と
五代目瀬川菊之丞の酒杉娘お三輪 細判錦絵
文政一年(一八一八) 千葉市美術館蔵



図12 溪斎英泉「浮世四拾八手 ひのきをたのしみにみる手」大判錦絵
文政四十五年(一八二二-三三)頃 千葉市美術館蔵



図11 溪斎英泉 秋葉常夜燈 大判錦絵三枚続
文政(1818-30)前期 千葉市美術館蔵

英泉画

るが、「両国の納涼」【図6】は、屋形船の納涼美人を手前に、隅田川東岸の賑わいを見渡すような構図で描かれる。小判という小さいサイズであり、また縦位置構図の画面では、風景画ならではの広がりを出し難く思われるが、文化期頃には北斎なども「(東海道五十三次)」などの小判や中判のシリーズを手掛けており、大判で制作されることの多かった浮絵を除けば、いまだ風景画は浮世絵の一分野として重要視されていない時代であった。英泉の表現も洗練されておらず、版画としても素朴な感じを受けるもので、やはり文化期に遡る可能性のある作品と見られる。上部に様式化された雲形があり、紅で彩色されているが、このような紅色の雲形は、寛政期頃から文政前期頃までの浮絵や風景画によく見られる表現の特徴でもある。

この紅色の雲形の表されることや、やはり素朴な画風から、「新版 浮絵五 百羅漢之図」【図7】など「新版 浮絵」と冠される総州屋与兵衛から出版された浮絵のシリーズも文化末く文政初期頃の早い時期の作品であろう。「溪斎英泉画」の落款で「英」の下部も「ハ」のような書体であるが、同じ時期でも主題分野や様式によって英泉は署名書体を変える傾向がある。

(3) 武者絵

「三浦之助広常」、「北條時政」、「渡辺ノ綱」といった武者絵類も、初期の作品と考えられる【註6】。このうち「三浦之助広常」と「北條時政」には、「極」印に加え楯円印「貳方」と読める改印が認められるが、この「貳方」印は文化十三年(一八二六)から文政四年(一八二二)の間に用いられたとされるものである【註7】。また「渡辺ノ綱」【図8】は「英泉画」の署名で、素朴な楷書の書体が珍しいが、同じ版元から出版された「真田与市 股野五郎」や「坂田ノ金時」も同時期の作例であろう。

いずれも黒色が基調の背景に、画面一杯に人物等を描き込む武者絵で、寛政(二七八九〜一八〇二)末期から武者絵をよくした勝川春亭(？〜一八二四)の画

風に影響を受けているように思われる。春亭の活躍を追って武者絵を手がけたのは英泉ばかりでなく、同時期には、歌川国貞(二七八六〜一八六四)、やはり文化末から文政初期の一時期だけ武者絵を描いていたらしい歌川広重(一七九七〜一八五八)、後の文政十年(一八二七)には「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」の出版がヒットとなり、「武者絵の国芳」として名を成す歌川国芳(一七九七〜一八六二)の名も挙げることができる。これら新世代の絵師達の中に限れば、英泉の武者絵は国芳の方向性に最も親しく感じられるが、その後本格的に武者絵に取り組む様子は見受けられない。

(4) 役者絵

役者を描いた錦絵は、先述の「風流花合」のこま絵を例外として、十一点が知られており、いずれも文化十年〜文政二年(一八一三〜一九)の間に上演された芝居に取材した作品【図9】である。すべて細判の判型で大判錦絵に比して紙の質も劣り、色版の数も少なく、最も安価な部類に属する消耗品的な性格の強い作品であり、英山の傘下にあった美人画界では、早期から重要視された存在である英泉が、役者絵界においては格下絵師の扱いであったことに気が付く。千代田歳一を名乗り、一時は狂言作者を目指した英泉は、歌舞伎にも親しんだはずだが、この時期以外に英泉が役者絵に筆を執った様子は見られない。当時役者絵の大御所歌川豊国(二七六九〜一八二五)を師とする国貞(三代豊国)が、早くも文化十一年、二年(一八一四、一五)頃に代表作「大当狂言内」で大判錦絵の雲母摺という豪華な役者絵を依頼されていた活躍ぶりや、その後豊国が文政八年(一八二五)に没してから、さらに国貞を中心とした歌川派が役者絵界で興隆したことを想起するならば、もはや英泉が役者絵で活躍する余地はなかった状況も容易に理解されるであろう。

(5) 摺物

英泉の摺物に関しては、これまで展覧会や画集で紹介される機会があまりな



図14 溪斎英泉「浮世風俗美女腕 幼真鑑鏡現 生減帯花知」大判錦絵 文政六七年(二二四)頃 千葉市美術館蔵



図13 溪斎英泉「当世好物八契」読物 大判錦絵 文政六年(二二三)頃 メイテレ名古屋テレビ放送蔵



図16 溪斎英泉「契情道中双嫁 見つけ 見立よしはら五十三つ 倉田屋内 佐多」大判錦絵 文政八年(二二五)頃 千葉市美術館蔵



図15 溪斎英泉「傾城道中双嫁 江戸日本橋 見立よしはら五十三つ 扇屋内 花扇」大判錦絵 文政八年(二二五)頃 千葉市美術館蔵



図18 溪斎英泉「信濃国一之宮 諏訪湖之御図」大判錦絵 文政5年(1822) 神奈川県立歴史博物館蔵

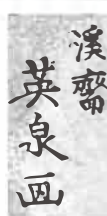


図17 二世南仙笑楚満人(為永春水)作、溪斎英泉画『軒並娘八丈』より「鎌倉磐米之光景」人情本 初版は文政7年(1824)＊掲載図版は後摺 千葉市美術館蔵

かったが、早い作例としては「声色好」【図10】と題した九つ切判の摺物が、文化十三年（一八一六）頃の制作になる可能性を小林ふみ子氏が考証している【註8】。署名は「溪斎英泉画」で、文化期に遡るとすれば、この署名のある最も早い時期の作品ということになるであろう。同形式の同時期の英山の摺物も知られていることから、やはり摺物においても英山の活躍域の一部を、英泉が担っていたものと考えられる。

（6）その他

「英泉画」の署名であるが、「英」の下の部分が「大」のようになっている「撫子に枝豆と轡虫」といった小判の花鳥画類、また「東海道五拾三駅名所古跡略記 道中双六」などの双六類も、早期の作品に位置づけることができる。

二、文政期の動向―英泉美人大首絵の流行とその周辺

（1）美人大首絵の流行

英山の錦絵のほとんどが文政初期頃までの出版であるらしいことから、この頃までにはその美人画スタイルも飽きられていたのであろう。これまで英山の傘下であり、むしろ英山の美人画を求める需要の一端を担っていたように思える英泉が、独立して評価を得るためには、英山様式とはまったく性格の違う、新しい美人画スタイルを打ち出して人々の関心を得る必要があった。

あらたな展開への発達途上にあたる文政三、四年（一八二〇、二二）頃の英泉作品では、英山の様式から離れると同時に、文化後期頃から活躍が目立っていた歌川国貞の生活感ある美人画に親しい感覚が表れる。この時期を代表する「秋葉常夜燈」【図11】（やはり「貳方」印がある。）や「初夏の雨」といった作品では、その後の英泉がむしろ避けたようにも思える情緒的な表現も心に残

る。また「青楼七軒人」などのシリーズも、国貞を意識したこの時期の代表的な作品といえるであろう。

英泉の個性が明らかになってくるのは、文政四、五年（一八二一、二二）頃から出版されはじめた美人大首絵においてである。現在十図が確認される「浮世四拾八手」のシリーズ【図12】は、中でも早い時期の作品と考えられる。画面に二人の美人を配し、主題に沿って描き分けられた女の表情が見どころであるが、美人の顔を美化して定型化するのではなく、生々しい表情を強調したその大首絵には、独特の強い存在感がある。

折しも、大首絵は何かと目立つので、今後止めるようにとした寛政十二年（一八〇〇）の厳しい禁令が、ようやく寛容に捉えられてきた時期でもあったらしい。主に歌麿をターゲットとしたように思えるこの禁令直後には、大首絵を出し難い状況があったと考えられ、役者絵では文化末頃に作例が増えるものの、英山にしても美人大首絵はわずかで、本格的に取り組んだ様子がない。あらたな様式による美人大首絵の出版は、長く待たれていたものと思われ、英泉を一躍スター絵師に押し上げたのである。

この成功以降、「浮世風俗美女競」、「今様美人十二景」、「当世好物八契」、「時世美女競」、「美人会中鏡」など、文政中期には、美人大首絵の優品が次々と出版されている。また後摺も多く認められることから、相当に摺増がされて、英泉の人氣需要に応えた様子がうかがえる。このうちほぼ制作年代が確定できる作品として、上部に描かれた曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』と『街道茶漬』の発行年から、「当世好物八契」【図13】は、文政六年（一八二三）頃の出版と理解される。また「浮世風俗美女競 勿真臨鏡現生滅帯花知」【図14】には「美艷仙花香」が描かれているが、出版物では文政七年刊の『江戸買物独案内』に書かれているのが早い例であることや【註9】、比較的太い署名書体の感じから、これまでもう少し早い時期に制作年代を置く場合が多かったが、やはり

図19 溪斎英泉「大空武左衛門」 大判錦絵
文政一〇年(一八二七) 相模博物館蔵



図24 溪斎英泉「江戸の松名木尽 押上 妙見の松」
大判錦絵 天保七・八年(一八三六・三七)頃
千葉市美術館蔵



図20 斎英泉「姿海老屋楼上」 大判錦絵三枚続
文政11年(1828) 千葉市美術館蔵



図21 溪斎英泉「仮宅の遊女」 大判藍摺絵三枚続 天保6年(1835)
千葉市美術館蔵



図23 斎英泉「北国八景 内 うらたんぼ 暮雪 玉屋内
白玉」 大判藍摺絵 天保期(一八三〇-四四)
名古屋博物館蔵



図22 溪斎英泉「傾城道中双蝶 かなや 見立よしはら五
十三対 尾張屋内 長登」 大判錦絵
文政八年(一八二五)頃 千葉市美術館蔵

さほど離れない文政六、七年（一八二三、二四）くらいの作ではないかと思う。

さらに美人画主題にも工夫を凝らし、右記のうち「今様美人十二景」、また「御利生結ぶの縁日」などは、当時の熟成した町人文化の中で起った杜寺参詣、行楽ブームにあやかっつて、江戸名所をこま絵に描き、美人と取り合わせることで一層購買率を高めたような企画であるといえる。

人気絵師英泉に遊女の絵を描いてもらうことは、吉原にとつてもステータスとなつた。当初から遊女絵を手がけていた英泉であつたが、大首絵で人気になつて以降には、「新吉原八景」、「吉原要事」、「廊中八契」、「傾城江戸方角」、「新吉原年中行事」など次々と実在の遊女を題材とした作品が出版されている。これらは吉原の依頼もあつての入銀物が多いと考えられているが、とりわけ「傾城（契情）道中双嫁」の五十五枚揃は、英泉にとつて最も大きな仕事となつた【図15】。東海道の各駅の景をこま絵に描き、妓楼名・遊女名と共にその姿を描くもので、日比谷孟俊氏は、文政七年（一八二四）四月の吉原の大火により仮宅の営業となつていたので、文政八年（一八二五）仮宅から吉原へ戻り営業再開を記念して出版されたものであろうと推察する^{註10}。高価な紅や紫など、鮮やかで濃厚な絵具の使い方などからも、吉原の入銀物らしい贅沢な出版であつたことが察せられる。またこのシリーズは「溪斎英泉画」署名であるが、東海道の後半の駅になると「溪斎」の字をくずした書体が多くなる【図16】ことから、これだけの大シリーズでもあり、一斉にすべてが出版されたというよりも、同じ年でも発表期間には幅がある可能性も高いであろう。

この時期には英泉にも相当の自負が生まれたと思われるが、天保四年（一八三三）、英泉自身が著した『无名翁隨筆』（通称『続浮世絵類考』）には、「青楼遊女の姿を写すに 悉く其家々の風俗襖姿を画くに 役者の狂言振に似せず時世の形骸を新たに画しは此人に起れり 近頃国貞も傾城画は英泉の写意に似せて画し者也」とある。役者の劇的な動作のようではなく、当世の女の真の姿を新

たに描いたのが自分であり、近頃は国貞もその画風を真似ているというのである。この時期確かに先行して美人画様式を展開していた国貞でさえ、英泉の強い個性に引つ張られていたように思える。

（2）風景画

文政期には、いまだ風景画が主要な浮世絵の分野として確立しておらず、風景画主題での活躍の場は摺物や版本、趣味的な出版物に限られていたようだ。例えば「温泉二番続」や「隅田川」といった摺物は文政期の作品と考えられるが、真景ともいえる細密さで、その眺望を描写している。文政七年（一八二四）に出版された『軒並娘八丈』の「鎌倉磐栄之光景」【図17】なども同様である。

「信濃国一之宮 諏訪湖之御図」【図18】は、確実に制作年のわかる貴重な作例である。手前に旅人が描かれ、高い視点から富士山の方に向いて湖面に高島城の張り出した諏訪湖の絶景を描いた作品で、「壬午二月吉日 上州 一宮社中」とあることから、文政五年（一八二二）の作であることがわかる。「一宮社中」とあり、「なかなか氷も今は解初て 霞むけしきのすはの湖」の句を配したところは摺物のようであるが、版元印もあり、一宮社中の入銀による商品であつたと思われる。墨に白抜き引きの引つ掻いたような描線を用いた実験的な描写も見られ、署名書体も「斎」の字などが通常とは変わっているが、絵は英泉のものとしてよいであろう。

このように風景画のジャンルでは、確実に文政期の作と考えられる一般的な商品としての錦絵出版はほとんど確認されなかったが、少なくとも英泉の風景画を描く素養は相当なものであつたことは確かめられる。

（3）相撲絵

わずかであるが、この時期の相撲絵で年代がわかる作品があるので挙げておきたい。

一つは「勸進大相撲取組の図 四ツ賀峯 源氏山」で、ここに描かれた力士

が揃うのは文政六、七年（一八二三、二四）であることから制作年代が絞られる。「英泉補画」という署名も珍しい。

もう一つの作品は見世物的な関取として話題となった大空武左衛門を描いた相撲絵である。相撲博物館所蔵の図【図19】には、「大空武左衛門 亥式拾式 歳 身丈 七尺五寸 量サ 三拾五貫目 手平壹尺式寸 足裏大キサ 壹尺三寸五分」とあるように、二メートル三〇センチ近くもあつたという大空武左衛門は、「亥」年に二二歳で、記録では亥年の文政十年（一八二七）五月に江戸に来ており、その後すぐ国に戻ってしまったというので、その制作年代が特定される【註11】。署名の「任好 英泉画」、書体も珍しい。

（4）摺物

文政中・後期には、色紙判の狂歌摺物が盛んとなり、英泉もまた多くの摺物を手掛けたようだ。松田美沙子氏が情報収集した英泉一枚絵の目録資料「英泉錦絵総目録」【註12】では、百点余の摺物の存在が確認され、英泉の画業の中でも重要な位置づけとなっていたようである。小林ふみ子氏の解説によれば、英泉に摺物制作を依頼した狂歌師の中で、狂歌名異岡尾花楼は深川の高名な料理屋尾花屋の主人、柳桜亭花也は第十一代長州藩主毛利斉元であるなど【註13】、多様な文化サロンからの依頼を受けており、摺物の世界においても人気の高い絵師であつたと思われる。

三、天保期～晩年の英泉

（1）藍摺

天保期（一八三〇～四四）になると、英泉の作画量が格段に減つたことは、すでに指摘のあるとおりである。急に人氣が落ちたというわけでもなさそうで、

文政十二年（一八二九）と天保二年（一八三一）に相次いで家が大火により類焼したせいとも、またこれをきっかけとして根津に移り、妹婿の若竹屋弥十郎の遊女屋経営に若竹屋里助として加わり、画料を得る必要もなくなったからとも想像されている【註14】。真実は明確ではないが、おそらく英泉の錦絵を求める需要は引き続きあつたにもかかわらず、英泉自身の事情や意識の変化が、文政期までの旺盛な制作状況を減退させた可能性は高い。その低迷期において注目されてきたのが左記の青葱堂冬圍『真佐喜のかつら』の記述である。

此絵の具摺物に用ひはじめしは、文政十二年よりなり、（中略）されど未錦絵には用ひざりしが、翌年堀江町式丁目団扇問屋伊勢屋惣兵衛にて、画師溪齋英泉^{（註15）}画たる唐土山水、うらは隅田川の図をヘロリン一色をもつて濃き薄きに摺立、うり出しけるに、其流行おひたしく、外団扇屋それを見、同じく藍摺を多く売り出しける、地本問屋にては、馬喰町永寿堂西村与八方にて、前北斎がゑがきたる富士三十六景をヘロリン摺になし出板す、是又大流行団扇に倍す、其ころ外にしき絵にも、皆ヘロリンを用る事になりぬ

すなわち英泉は、文政十二年（一八二九）には摺物に用いられていた舶来の化学染料の藍色である「ヘロリン」（ペロ、通称ペロ藍＝プルシャン・ブルー）を翌年団扇絵に導入して、それが藍摺として大流行するきっかけを作つたというのである。

ヘンリー・スミス氏は、ここに記された「唐土山水」を、ブルックリン美術館が所蔵する団扇絵であると特定している【註16】が、藍摺の団扇絵、また風景画は残存数が非常に少なく、実態を推測するにも資料が乏しいため、ここでは美人画についてのみ取り上げる。

「姿海老屋楼上之図」【図20】は、吉原の妓楼姿海老屋の姿野という遊女を中

心に、豪華な遊女の居室で、琴、胡弓、三味線という三曲合奏が行われている図である。胡弓を弾く遊女のそばに「七里改二代目 姿野」と記されており、吉原細見と照合すると、姿野が登場するのが文政十一年（一八二八）秋からであることから、制作年代を特定できる錦絵である。

一方藍で摺られた「仮宅の遊女」【図21】は、遊女達の姿は模様など一部改変するのみでほぼそのままに「姿海老屋楼上之図」の版木を流用し、背景を隅田川の景色に変更し、一部の文字を消すなどして、あらたに藍摺として出版した版である【註16】。天保六年（一八三五）、吉原で大火事があり遊郭が全焼、再建工事の間は隅田川沿いの仮宅で営業していることが分かっているため、本図の制作年代が判明する。すなわち「姿海老屋楼上之図」から「仮宅の遊女」まで、実に約七年の期間を置いて版の流用による藍摺出版が行われていることになる。

そして今回確認されたのは、この例ばかりでなく、英泉の藍摺の美人画のほとんどが、文政期の美人画の版を流用しているらしいことである。例えば先述のように文政八年（一八二五）に出版された錦絵の「契情道中双嫁 かなや」【図22】は藍摺の「北国八景之内 うらたんぼ 暮里 玉屋内 白玉」【図23】に、錦絵五枚続の「当世五人女」は、「流行藍仕立」と題を変え、藍摺で出版されている。天保期に入って錦絵の作画量が極端に減ったと考えられる英泉であるが、その人氣が急に途絶えるわけもなく、むしろ藍摺の英泉という需要は高まって、既成の錦絵の版木から藍摺を派生させることで、一般の求めに応え、版元にとっても合理的な商売したのである。署名の部分の版木も流用されているため、このような藍摺の署名書体から制作年代を類推することはできないという点も留意する必要がある。

（2）その他天保期の美人画

「仮宅の遊女」が出版された天保六年（一八三五）頃までは、版の流用による藍摺を多く出版していたらしい以外にはあまり目立つた活躍が認められない。し

かし文政期のような作画量には到底及ばないものの、その後美人画と風景画の分野では、堅実な仕事が見られてくる。ある程度制作年代が類推できる作品として、「江戸の松名木尽 押上 妙見の松」【図24】を挙げておこう。この娘の着物に表された雪の結晶をモチーフにした雪華模様は、古河藩主土井利位が舶来の顕微鏡を使って雪の結晶を観察し、これを天保三年（一八三二）に私家版『雪華図説』にまとめ、これが天保七年（一八三六）の鈴木牧之『北越図譜』に引用されて一般にも流行したもので、それ以降の間もない時期の制作と考えることができる。またベロ藍の使用や、様式から、「三世相逢生競」、「江戸名所仇競」、「物日のあそび」、「当世会席尽」、「当世名物鹿子」、「当世（美人）料理通」、「一筆庵英泉画」の署名のある「浮世姿」などのシリーズもおそらく天保後期の作品と考えられるが、具体的な年代はまだ考証の余地があるであろう。「今様花鳥風月」のように美しいベロ藍の青を生かした三枚続の見応えのある作品もある。

掛物絵では「手習草紙を持つ娘」【図25】の画中に描かれた手習草紙に「天保丑歳 正月吉日」とあり、天保十二年（一八四一）の作であることが確認される。掛物絵は文政・天保期を通して比較的安定して制作が続けていたように推察しているが、やはり掛物絵の中にも、先行する作品の版木の流用で済ませている例や、あらたに版をおこしてはいるが、図柄はほぼ同じで色や模様を変えた例【図26、27】なども散見され、英泉が実際に手を加えたものかどうかさえ疑わしい作品も多くあるようである。

（3）風景画

天保二年（一八三一）頃に起筆された葛飾北斎の「富嶽三十六景」、次いで四年頃に起筆された歌川広重の「東海道五拾三次之内」のシリーズは、大変な人氣を得て、この時期浮世絵における風景画というジャンルが確立された。「東海道五拾三次之内」と同じ版元保永堂竹内孫八が英泉を起用した「木曾街道」のシリーズは、さらなるヒットを狙った企画に違いなく、版元ばかりでなく英



図27 溪斎英泉 からかさ美人 大判錦絵 二枚続(掛物絵)
天保期(八三〇―四四) 千葉市美術館蔵



図26 溪斎英泉 瓢箪衣裳の傘さし美人 大判錦絵 二枚続(掛物絵)
天保期(八三〇―四四) メ〜テレ(名古屋テレビ放送)蔵



図25 溪斎英泉 手習草紙を持つ娘 大判錦絵 二枚続(掛物絵) 天保一二年(八四一) * 『原色浮世絵大百科事典 第八巻』大修館書店 一九八一年より転載。



図29 溪斎英泉 「第二 木曾街道 板橋之駅」(後版) 大判錦絵 天保6年(1835)頃 千葉市美術館蔵



図28 溪斎英泉 「第二 木曾街道 板橋之駅」(初版) 大判錦絵 天保6年(1835)頃 千葉市美術館蔵



図31 溪斎英泉 「江都隅田川雪之遠景」 大判錦絵 天保(1830-44)後期 神奈川県立歴史博物館蔵



図32 溪斎英泉 富嶽三十六景 御厩川岸 両国橋夕見 大判錦絵 天保2-4年(1831-33)頃 大英博物館蔵 © Trustees of the British Museum



図30 溪斎英泉 江戸両座芝居町顔見世之図 大判錦絵 天保12年(1841) 神奈川県立歴史博物館蔵



泉にも相当の意気込みがあったものと想像される。自らも北斎への尊敬の念を『无名翁随筆』に書き記している英泉であれば、広重ばかりでなく北斎の存在も十分に意識されていたであろう。「木曾街道」の初版の中でも早い摺では、「富嶽三十六景」の藍摺を思わせる清々しい藍色を基調にした版がある。

「木曾街道」のシリーズは、「日本橋」画中の書き込みから天保六年（一八三五）に出版が始まったと考えられている。一方で同じ頃北斎は「百人一首乳母が絵説」のシリーズにおいて、版下絵は多く残り百図を目指したと考えられるものの、実際には二十七図しか出版されず、この企画の失敗によるものか、以降は錦絵をほとんど出さなくなり、肉筆画や絵手本類に集中したらしい。北斎不在の錦絵界、奇しくも英泉が本格的に風景画に取り組み始めたのは、この時期ということになる。

しかし「木曾街道」の全七十図のうち英泉が手がけたのは二十四図で、途中広重に交替し、版元も保永堂竹内孫八から錦樹堂伊勢屋利兵衛との共版、さらに錦樹堂のみとなり、後摺では英泉の名も消えており、何らかのトラブルがあったものと推測されている【図28、29】。理由はまだ定かではないが、シリーズ途中での広重への絵師交替、また署名を削る事態になったことは、英泉にとっても不本意なことであつただろう。

ペロ藍の導入状況などをもとに【註17】、今回あらためて風景画の制作年代を考えることになったが、その多くは天保後期頃と推察される。版元川口屋宇兵衛から出版された「江戸両座芝居町顔見世之図」【図30】が、浅野秀剛氏により幟に記された役者の動向から天保十二年（一八四一）と考証されたことから、同じ版元の一連の作品と同様の画風を示す風景画は同時期の作品と考えられるであろう。その川口屋版の中でも「江都隅田川雪之遠景」【図31】が北斎の「富嶽三十六景 御厩川岸 両国橋夕見」【図32】の図柄に倣っていることなど、引き続き北斎への意識は残されていたようである。

特に改印から天保十四年（一八四三）から弘化三年（一八四六）の間に出版されたと考えられる「江戸八景」の八枚揃や「日光山名所之内」の五枚揃は力のもつた描写を見せる。若い時から宋や明代の絵画、おそらくは山水画に親しんだという英泉は、錦絵では美人画より風景画により力が入っていたように思える。北斎や、実質的なライバルであつた広重が明快な線と面による表現を求めたのに対し、英泉はむしろ本画に見るような筆致を版で再現し、重厚な味わいを目指した様子がある。風景画の掛物「月夜山水図」「雪中山水図」（いずれも重要美術品）といった名品は、その最高峰ともいえるであろう。

（4）「美人東海道」と晩年の錦絵の混乱

天保後期、唯一の大シリーズとして記憶される「美人東海道」は、「掛川宿 廿七」の図に天保十三年（一八四二）に刊行された『南総里見八犬伝』第九輯巻之五十から五十二、五十三の上下五冊と分かる冊子が描き込まれていることから、およそ制作年代が特定される。四十図までが確認されるが、「三十一」から「四十」までの十点は「田中」の名主印があり、絵の成立は天保十三年頃としても実際の刊行は天保十五年（一八四四）から弘化二年（一八四五）の間のことであるらしい。一部版下絵も残されており【註18】、東海道五十三次分（五十五図）の刊行は予定されていたのであろう。手前に生活感ある姿で美人を描き、上部背景には東海道各駅の風景画が描かれる。余白には三日月連による句が記されており、このメンバーの入銀物であるとも考えられている。色彩も濃厚多彩で、途中で刊行が控えられたのも、天保十三年の禁令で錦絵の彩色は七、八色まで、販売価格を十六文以下とされたせいであるかもしれない。いずれにせよ錦絵の美人画では、晩年を代表する大作といえる。

さて英泉が嘉永元年（一八四八）に没して後も数年は、いまだ英泉の錦絵への需要はあつたものと思われる。その需要に応えて版元は、やはり以前に出版した作品の版本から主要な図柄と署名の部分を利用して出版していたらしい。例

えば「美人東海道」保土ヶ谷 五【図33】の布団の上に腰掛けて休む年増の女の図柄は、名主双印の改印「村松」福」とあることから英泉没後の嘉永二（五年）（一八四九（五二））に出版されたと考えられる「江戸名異女図会 大門」【図34】に流用されている。主版はそのまま、着物の模様を表す色版が一部省略されたり、変更されたりしており、こま絵も粗雑な描写である。他にも「美人東海道」は「夜の梅」を背景にした三枚続に流用されるなど、このような作例は決して少なくない。あまりにも単純な構成であつたり、人物と構図や色バランスの悪い背景を持つ作品は、実際英泉の監督下で、その筆によつて描かれた背景なのかどうか疑わしい場合も多々あることから、絵師の評価に含めるべきではなく、注意を要するであろう。

おわりに

武家出身で、書物を好んだと自ら記す英泉は、天保後期には、一筆庵と号して文筆家として筆を執ることも多かった。また教養と学究的な一面の表れる出版物もあり、弘化二年（一八四五）に出された「武威豊島郡峡田領在土楓川鎧之渡古跡考」は、英泉が当時住んでいた坂本町周辺を、地域の名所旧跡、著名人の考証を交えて著した趣味的な地図である。同じ年に出された「天保十五年の刊記がある」『好古集覧 革究図考』は、甲冑などに用いられる古染革を記録した彩色摺の図像集に自ら解説も加えた労作で、池田義信と本名を記す署名からも、英泉の武士らしい一面を見るような気がする。当初から美人画の絵師として注目され、最後まで美人画の需要に応えた絵師であつたが、このように見てくると、特に天保期以降の美人画については、作画量も不安定で、版木の流用もしばしば行っているらしいことがわかる。一方で風景画や版本挿絵、最後に挙げ

図33 溪斎英泉 美人東海道「保土ヶ谷 五」 大判錦絵
天保一三年（一八四二） 千葉市美術館



五
英泉
画

図34 溪斎英泉 「江戸名異女図会 大門」 大判錦絵
嘉永二五年（一八四九（五二）） 千葉市美術館



た考証物の緻密な取り組みは、英泉の本来やりたかった仕事の在処を示しているように思う。今回は膨大な版本での仕事を画業にからめて論じることができなかつたが、今後さらに英泉の実像が解明されてくることが待たれるであろう。

【註17】 下山進「青色着色料「ペロ藍」の導入に二役買った溪斎英泉―本藍からペロ藍の時代へ―」『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)所収。
【註18】 浅野秀剛「美人東海道」の版下絵『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)所収。

【註1】 英泉作品の収集家としても知られ、そのコレクションは一九七二年に「江戸おんな百景 英泉浮世絵展」(東京新聞)として初公開、さらに一九八二年に「彷徨の浮世絵師 溪斎英泉展」が開催されている。その後、一九八五年から一九八七年にかけて、千葉市がこの英泉コレクションを収集、現在千葉市美術館に収蔵されている。
【註2】 英泉は若い頃篠田金治に弟子入りして千代田蔵一と名乗って狂言作者となったと伝えられる。浅野氏によれば、弟子入りしたのは文化九年で、翌年の十月以前にはその門を離れたと考証され、この作品に何らかの関係があるものと推測されている。加えて四代目瀬川路考が文化九年十一月二十九日に亡くなっていること、改印の「森治」(森屋治兵衛)から制作年代が推定される。参考文献『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)同作品解説。

【註3】 松井英男「溪斎英泉初期作品群の研究」没後150年記念 溪斎英泉展(一九九七年 太田記念美術館)によれば、画中に「溪斎」の隠し落款と刊行年文化十四年を表すと思われる「文化丑」の文字が入っている。
【註4】 大英博物館ホームページ上の所蔵品検索によれば、英泉作として多くの春画摺物が登録されている。

【註5】 ボストン美術館ホームページ上の所蔵品検索で、菊川英山の作品として登録される錦絵の春画巻物の画像を確認した。
【註6】 前掲【註3】論文。

【註7】 Andreas Marks "Publishing of Japanese Woodblock Prints: A Compendium" (Hoei Publishing, Leiden & Boston, 2011)

【註8】 『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)同作品解説。

【註9】 「美艷仙女香」については、花咲一男論文「化粧文化」第四号、一八号、二五号所収)に詳しい。

【註10】 日比谷孟俊・佐藤悟・内田保廣「吉原細見データベースとAttributeとしての紋を用いた文政期における英泉筆遊女絵開板時期の特定・契情道中双蝶見立吉原五十三對を例として」『浮世絵芸術』一六三号(国際浮世絵学会 二〇一二年)

【註11】 『藤岡屋日記』文政十年五月および文政十一年正月の項に、大空武左衛門について記述がある。

【註12】 松田美沙子編「英泉錦絵総目録」『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)所収。

【註13】 『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)No.201、No.215作品解説および津田真弓「柳枝亭江戸廻花也(長州藩主毛利斉元)の狂歌摺物―伝記と『斉元公戯作集』を中心に―」『浮世絵芸術』一六一号(国際浮世絵学会 二〇一一年)。

【註14】 おおさわまこと『溪斎英泉』(郁芸社 一九七六年)

【註15】 ヘンリー・スミス著、樋口一貴訳「浮世絵における『ブルー革命』」『浮世絵芸術』二二八号(日本浮世絵協会 一九九八年)

【註16】 『千葉市美術館所蔵浮世絵名品選』同作品解説(千葉市美術館 二〇〇一年)、日比谷孟俊「溪斎英泉が描いた京町二丁目『姿海老屋』の人事異動」『浮世絵師 溪斎英泉』図録(千葉市美術館 二〇一二年)所収。

The Development of Keisai Eisen the Artist

Masako Tanabe

From the later years of the Bunka era (1804–1818) until his death in 1848, Keisai Eisen (1791–1848) became one of the most important *ukiyo-e* artists active during this most mature period of Edo's urban culture. Eisen was a popular artist who created a unique style of beauty images known for their sense of bewitching loveliness set amidst the everyday. Since his beauty works were so captivating, the focus has naturally been on only these images in both exhibitions and art books. Research on Eisen was spearheaded by Imanaka Hiroshi's *Eisen chogasaku mokuroku* (Catalogue of Eisen's Printed Books, Ryûtei Bunko, 1956) and Ôsawa Makoto's opus *Keisei Eisen* (Ikugeisha, 1976). These two works compiled the results of studies on the artist, primarily his massive production of authored and illustrated printed books, and his richly diverse and dramatic life.

However, Eisen's artistic production was hugely varied, from his considerable contribution to the establishment of the landscape genre within *ukiyo-e*, to the creation of warrior prints, children prints, toy prints, bird and flower prints, surimono private edition prints, *ukiyo-e* paintings, and even a few actor and sumo prints. In terms of materials used, Eisen's name appears around 1830 (Bunsei 13 /Tempô 1) in the Masaki no katura as an artist who very early on used the Prussian Blue artificial pigment brought to Japan from the West, and his later publication of numerous *aizurie* (indigo print) works hints at the reason behind his nickname at the time, "Aizuri Eisen."

While the CCMA collection includes approximately 300 works by Eisen collected by Imanaka Hiroshi, and held a special exhibition on Eisen (May 29–July 8, 2012), I believe there is a need for a renewed investigation into the entirety of Eisen's artistic development. This article will provide a detailed and thorough overview of his oeuvre, starting from the base of existing studies of the subject, touching upon all of the activities involved in Eisen's diverse career as a woodblock print artist, and considering not only his beauty images but also his other work in other subject genres.

(Translated by Martha J. McClintock)

事業報告 所蔵品データベースを使った鑑賞授業の試み

山根 佳 奈

一、はじめに

美術館と学校の連携については、全国の館がそれぞれの地域の実情に沿って工夫をこらしており、展示室でのグループ鑑賞から、出前授業、中学生による展覧会作りにいたるまで、近年様々な報告がなされている。本稿では、千葉市美術館と市内の中学校が共同で取り組んだインターネット経由で教室からアクセスできる所蔵品データベース(画像付き所蔵品検索システム)の活用例を報告したい。データベースあるいはそれに類似する作品紹介ツールは、全国でその公開と活用が進められてきた。複数館を横断しての検索システムや、共通のフォーマットを作り出そうという試みも見られ、一般利用者から研究者にいたるまで幅広い層の利益となる情報の共有化が進められようとしている^{註1}。こういった動きの背景には、業務の効率化だけでなく、美術館・博物館の収蔵品に関するデータを、管理している個々の学芸員だけが分かれば良い(＝担当者が居ないとも何も分らない)というこれまでの状況から館全体の業務の中に組織的に位置づけようというように変わり、ひいては広く財産として共有化し、研究や教育のために公開・活用できるようにしようという意識の変化があるといえるだろう。効率的なシステムの構築については、主に美術館・博物館の情報管理活動の分野で盛んに議論がなされているが、本稿は、これらをツールとして教育普及活動の中でどのように活用してゆくか、ということところに主眼を置いて

ている。所蔵品検索システムを研究者ではない一般の利用者が積極的に活用するとしたら、どのようなニーズがあるのか、その掘り起こしにもいずれ取り組みたいと考えている。それによつて、様々な事情により来館が現実的ではない利用者へのアプローチが見えてくるだろう。美術館(歴史・科学系ではない博物館)の場合、画像等の複製の利用については、手放して進められない悩ましい問題もあるが、矛盾を抱えつつも、その活用案を探ってみたいと思う。

なお、本稿は、平成二三年八月四日に開催され、稿者も参加した「第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会」での研究発表^{註2}をふまえて、再度美術館の視点でこの実践を振り返りまとめたものである。発表者の阿部真紀教諭(千葉市立大宮中学校美術科教諭)をはじめ、研究グループの諸先生方、および千葉市教育研究会に、この場を借りてお礼申し上げたい。

二、中学校との連携について

千葉市では、市内の公立小中学校(小学校一一六校、中学校五七校、特別支援学校二校／平成二四年五月現在)の教職員が教科ごとに分かれて参加している授業研究の場「千葉市教育研究会」の「造形部会」の中に、学校と美術館との連携を考えるグループ(以下、「連携グループ」と表記)が発足して八年が経

つ。その経緯については、二〇〇五年度の当館研究紀要^{註3}でも報告したとおりであるが、発足当初から、実際に美術館に足を運んでの活動だけでなく、足を運ぶなくても教室でできることを模索してきた。それは、当市ではアクセスの難しさを理由に美術館活用の一步が踏み出せない中学校が依然として多いためである。

職員が意欲的で立地等の条件にも恵まれた学校は、美術館との連携を単独で進めて行けば良い。だが、有志ではなく公式の授業研究・情報交換の場として、市教育研究会^{註4}に位置づけられたこのグループの役割は、自分たちの経験（実験）を市内全体で共有化することにある。美術館の活用方法、授業プログラム（実験）を開発にあたっては、連携グループはその基本となるシステムと実践例を用意する。ここでは、取り組みやすく応用の利く、わかりやすい提案であることが求められている。

今回報告する「所蔵品データベースを使った鑑賞授業の試み」は、連携グループが取り組んだ過去の鑑賞授業の実践^{註5}をふまえたプログラムの提案とその成果である。本稿のタイトルには、「鑑賞」授業という言葉が登場する。美術館とその所蔵品・資料を活用する場合、必ずしも「鑑賞」にこだわることはないと思うが、カリキュラムの中で保障されている「鑑賞」授業の中で、できることはもつとあるのではないだろうか。実際の作品を前に、複製からは得られない、作品そのものにある物質としての豊かさ、つまり、微妙な色彩、テクスチャー等を味わうという「鑑賞」体験を教室で求めることはできない。むしろ、教室での複製を利用した「鑑賞」では、「良さ」といった感覚的なものを中途半端に求めるのではなく、意識的に観ること、視覚情報を整理して、それを次の鑑賞活動へとつなげてゆくことの方が有効ではないかと思われる。また、稿者は年間二〇件を超える学校団体の来館と作品鑑賞に立ち会っているが、多くの場合、子どもたちは制作者の立場から鑑賞に取り組んでいる（その

ように指導されている）ように見受けられる。作品鑑賞の体験が、子ども自身の作品制作に影響を与え、表現の幅を広げることは確かに結果として評価すべきだが、「鑑賞」教育の本来の目的はもつと他のところにあるのではないか。

展示室や教室での鑑賞教育がここまで普及したことについて、対話型鑑賞法が果たした役割は大きい。コミュニケーションスキルの向上や言語活動という意味で、この手法が高く評価され、美術や作品に関する知識を持たなくても誰もが取り組めるメソッドとして広まった。その一方で、作品にまつわる歴史や固有の情報を伝えることについては消極的な声が多い。鑑賞能力の向上は、鑑賞者の他の学習分野への意欲や関心も引き出す。主体的な鑑賞者を育てることは、美術館鑑賞教育の究極の目標であり、『対話による鑑賞教育 中学校美術教師のための実践ガイドブック』の中で上野行一氏も述べているように、そのための手法として対話型鑑賞が有効なことに変わりはない^{註6}。ここでも述べられているように^{註7}、対話型鑑賞に知識が不要であるとの見方は全くの誤解である。ことに中学生の場合、言語活動のみに特化してしまうのはもったいない。対話型鑑賞の良い部分を生かしつつ、作品への迫り方を中学生にふさわしく深めてゆくことはできないだろうか。作品をわずらわしい文脈から切り離し、鑑賞者自身が意味を読み取り新しい価値を創造することは重要だが、造形的な意味に加えてとりわけ資料的価値の高い美術作品（たとえば浮世絵）については、そのアプローチではたどり着けないものも多い。視覚資料を読み解く楽しみに加え、鑑賞作品の周囲に無数の関連作品があることを知り、芋づる式に関心の幅を広げてゆく楽しさ、またそれらの情報を整理する作業は、発達段階に従って適切に導入されれば、鑑賞能力の向上を促すことができるのではないだろうか。

市教育研究会中学校造形部会に置かれた連携グループのこれまでの研究課題

は、一貫して、美術館と中学校との「通常ベースの」連携であった^{註8}。特別な機会、特別な予算を組むのではなく、通常業務・授業の中であるものを最大限生かしてだけのことができるのかを探ってきた。コレクションの性質と展示スペースの都合から、いわゆる「常設」展示を行わず、所蔵品はテーマ展示（所蔵作品展）というかたちで公開し、一、二ヶ月の会期ごとに展示内容がすべて入れ替わってしまう当館のコレクションを継続的に活用するためには、展示室の特定の作品を取り上げて取り組むプログラムは不向きである。とはいえ、企画展への来館を促す事業が少しずつ定着してきた今、コレクションへの理解と愛着をどのように育ててゆくかという長年の課題にも、そろそろ向き合うべきだろう。

今回は浮世絵データベース試行のタイミングにあわせての研究となったが、鑑賞授業の題材に浮世絵を取り上げたのはデータベースがあるという理由だけではない。浮世絵は中学生が授業その他の場面で接したことがあるものであり、今後も何らかの場面で接する可能性の高いものだということ、それ以上に、様式・歴史的背景の理解が確実に作品理解を深めるであろうこと、原則として様式・約束事の上に成り立つ作品であり、得た知識の他作品への応用が期待できること、さらには、美術鑑賞以外の分野に興味を広げてゆける題材であることを重視した。

当館では、別途送迎バスを使つた小中学生の団体鑑賞プログラムを用意しているが、この事業での鑑賞も規模の大きい企画展会場が中心になる。この事業は中学校にはなかなか利用しづらいという現実^{註9}に加え、鑑賞プログラム（小学生向けのものを応用）の物足りなさ・もどかしさを感じるようになり、中学生を対象とした鑑賞プログラム、作品への効果的な迫り方の開発が求められていた。今回の連携授業では、残念ながら展示室での浮世絵作品鑑賞こそ叶わなかったが、中学生が段階を追って作品をより深く観てゆく過程を目の当たり

にし、適切な知識、視点・切り口の設定が鑑賞者の興味関心を促すものとして有効であると確認できたことは、今後の参考になるだろう。

三、所蔵品データベースの教育普及活動での利用について

所蔵品のデータベース（本稿では、電子化され検索機能を持つものに限る）については、近年整備が進み、その重要性和技術的な成果については、研究会等の場でさかんに議論と情報交換が行われているようである。所蔵品データベースの目的は大まかに二つあるといえるだろう。一つは、収集資料（作品）の管理という、博物館（美術館を含む）の機能を支えるものである。収集・保存・展示の各活動に直結するものと言ってよい。館内業務の効率化には不可欠で、コレクション形成に先立ちシステムを構築する場合もあれば、紙ベースの登録作業から移行をはかる場合もある。もう一つは、情報公開のためのツールであり、これは広報に加えて教育普及的な活用に特化されたものといえるだろう。

データベースのあり方について、二〇〇五年と二〇〇九年から二〇一一年にかけて国内の美術館ホームページの状況調査を行った国立新美術館の室屋泰三氏は、それらを「紹介」型・「リスト」型・「検索」型の三つに分類している^{註10}。「紹介」型の場合、いわゆる「優品」をピックアップし、キャプションデータ相当の作品情報を備えつつ、鮮明な画像とともに解説文によって作品の魅力が紹介される。疑似鑑賞ともなるため、「鑑賞の続きは本物を美術館で」といったコメントが添えられる場合もある。「紹介」型データベースは規模の大小はあつても導入している館は多いようだ。スマートフォンアプリとして公開されている国立西洋美術館の“Touch the Museum”^{註11}などは、最新メディアを駆使した紹介型の典型であろう。「リスト」型は、所蔵作品の情報をた

たとえば収蔵年度ごとにリスト化したものとされ^{註12}、むしろ館内作業での実用性を重視していると思われる。他方、キーワード入力による「検索」型の場合、使い方は検索者の関心に委ねられている部分が大きい。ちなみに当館の場合、ホームページ上の先行する「紹介」型に加えるかたちで、同ページ内(末尾)に作品の一部を対象としたデータベースが追加された。このデータベースは、「検索」型を指しつつ現段階では未完である。東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の横断検索システムである、独立行政法人国立美術館「所蔵作品総合目録検索システム」^{註13}は、「検索」型の典型といえるだろう。トップページは画像の無いシンプルなデザインで、ジャンル・作品題名・作家名・作家名読み・制作年代・複合からなる検索方法が用意されている。東京藝術大学は、膨大なコレクション約二八、〇〇〇件のうち二六、二五七件の作品情報、一一、九八〇点の画像を試験的に公開している^{註14}。東京国立博物館のデータベースは、複数レベルに分かれており、中でも「名品ギャラリー」^{註15}は所蔵品の中から「優品」約六〇〇件のデータを閲覧でき、作品紹介ページに近い。同様に、国宝・重要文化財を対象とした国立文化財機構によるデータベース「e国宝」^{註16}も公開されている。もちろん画像は学校利用等も可能である^{註17}。これとは別に同博物館のサイトには画像検索のページがあり、約七九、〇〇〇点(二〇一一年一月現在)の文化財画像を見ることができる。この画像データベースは調査・研究の項目内に位置づけられ、他の研究データベースとともに「その先へ」と興味をつなげてゆくための手がかりを利用者に与えている。以上、ここに例を挙げたのはいずれも組織の大きなところであり、現実的には、中規模以下の施設が所蔵品すべてを網羅的にデータベース化し、一般の利用に耐えるシステムにして公開するのは難しい。上記事例も、既存の館内用データベースを転用したり、助成金の獲得や外部組織との共同開発などによって実現したものである^{註18}。

データベースを利用した鑑賞授業を可能にするためには、インターネットからのアクセスが可能なのもちろんのこと、一般利用者に使いやすい検索システム、画像があること、その画像がある程度の拡大に耐えることが最低条件であろう。一方、教室環境については、インターネットに接続できるパソコンの整備と全員で一つの画面を見ることが出来るモニターの確保が望ましい。千葉市の中学校には、二〇〇九年度より地デジ対応の液晶・プラズマ大型テレビが各教室に配置されており、画像や映像を使った授業に利用できる環境が整っている。なお、教室でのプロジェクターによるスクリーン投影は望ましくない。備え付けのスクリーンの場合、ゆがみや傾斜による色飛びに加え、暗幕をひいてもなかなか暗い空間が作れず、劣悪な鑑賞環境となる。これは以前、連携グループが授業案を用意して市内ほぼ全ての中学校で取り組んだ授業の際に大きな問題となった。

また、前提として、美術館の所蔵品には偏りがあるということを、教材として活用する場合は理解しておくべきである。コレクションの特徴を理解し、それを積極的に生かす工夫が必要だろう。

四、千葉市美術館「浮世絵データベース」について

「浮世絵データベース」(正式には、「千葉市美術館所蔵品検索システム」)。管理用データベースに登録された所蔵作品九、〇〇〇点弱^{註19}のうち、コレクション方針二の「近世・近代の日本絵画と版画」の中から、インターネット上で浮世絵作品の検索ができる。以下、「浮世絵データベース」と表記。<http://www.ccmn-net.jp/search/index.html>は、当館の所蔵品の一部を外部から検索



図1

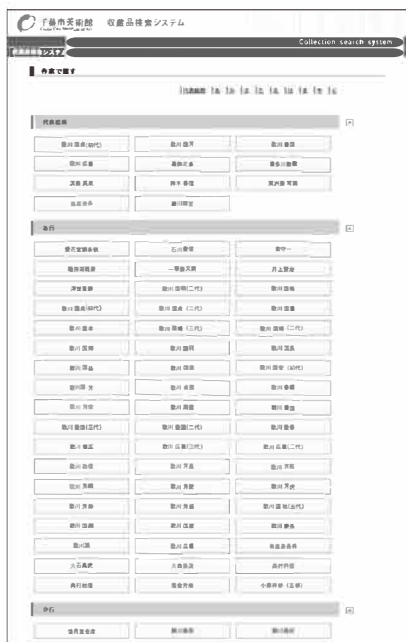


図2



図3

できるサービスとして、平成二三年度よりホームページ上でパイロット版が公開された【図1】。所蔵品の中から代表的なものを何点か紹介するページはすでに存在しており、今回あらたに公開されたものは、より積極的な美術館利用者が当館のコレクションの内容を調べるための手段として想定されている。浮世絵データベースの整備は、当館が平成二二年九月から翌年二月末までの間、空調設備工事のため展示室、貸出施設、美術図書室等を休室していた間の事業として行われた。既存の作品管理のための館内用データベースを公開用に整備することになったが、もともとなったデータベースは、平成五年に整備開始、平成六年に導入されたもので、当館オリジナルのシステムとして構築されたものである。版本を除く浮世絵作品が今回公開対象とされたのは、当館のコレクションのうち比較的まとまりのある分野で、かつ、著作権問題がクリアされているからである。先行するデータベースにはもともと画像の項目が設けられていたが、コレクションに新しい作品が加わるたびに情報は順次追加登録されてきたにもかかわらず、ほとんどの作品に画像が添付されてこなかった。そこで、

データベースの公開に備えて、すでにある写真(ポジ)をスキャンしてはめ込む作業が進められた。適当なポジの無いものについては新規に撮影した。画像のサイズは、検索・閲覧に支障が出るほど重すぎず、かつ、拡大できるサイズとして、一〇二五ピクセルに設定した。総数二、一二一件のうち、現在画像があるものは一、五九六件(約七五%)だが、将来的には全点画像付きデータベースとしての整備をめざしており、学校等を含む教育・研究目的の利用にこたえるものしたい。なお、パイロット版の公開以降、平成二四年度に予定されている企画展にあわせて、溪斎英泉の画像のみまとめて追加された。

「浮世絵データベース」は、当館トップページ(<http://www.ccmn-net.jp/>)の「所蔵作品」の項目から「近世・近代の日本絵画・版画」を選択すると、その一番下にリンク先が掲載されている。千葉市美術館の所蔵品のうち、版本を除く浮世絵のみを検索することができる。「作家で探す」「条件を入力して探す」の二つの方法があり、「作家で探す」を選択すると、代表絵師一人を筆頭に、



図 4



図 5

その下にあいうえお順で絵師一七八人が並ぶ【図2】。「作家無し」の項もある。作家名を選択すると、画像(ある場合のみ)とともに作品名・作家名/作家名読み・分類が表示される。画像一覧のみの表示(二画面に二〇件)に切り替えることもできる【図3・図4】。一方、条件を入力して探す方法では、作品名・作家名・分類のいずれかをヒントに検索することができる。分類は、肉筆・版画・その他の三つに分かれている【図5】。

実際には、一般利用を想定したデータベースとしては、まだまだ不十分といえるだろう。後に紹介する連携グループからの要望を見るまでもなく、キーワード検索の充実や画像の整備など、今後の課題は多い。

五、浮世絵データベースを使った授業

連携グループが平成二二年度の課題として取り組んだ「浮世絵データベース」を使った授業は、最終的には「美術館と学校が連携して、作品のよさや美しさを鑑賞させる授業の創造」浮世絵を読み解く面白さを知る鑑賞を通して「〜」というテーマでまとめられ、新潟での研究発表に臨むこととなった。ここでもまとめられているように、取り組みの中心となる作業には、資料・情報に基づく作品の「読み解き」が置かれている。画中に手がかりを求め、それらの読み解きを通して、作品を味わおうというものである。また、データベースの特徴を生かし、一点の鑑賞を入口に、作家、主題、制作年代などの類似する作品にも関心が広がってゆくことを期待した。

授業は、導入部分として、「浮世絵とは何か」を学ぶところから始められた。表現や技法といった造形的価値だけに基づく鑑賞ではなく、浮世絵というジャンルの中身やその機能、同時代に果たしていた役割等をふまえた上で、個々の作品に迫ろうというものである。鑑賞者にあわせて、「鑑賞の入口・切り口をどこに設けるか」は、効果的な鑑賞教育の鍵となるものだ。今回は、浮世絵鑑賞の手がかりは美術館が用意した。一般来館者向けのギャラリートークなどで押さえる基本的なポイントを紹介し、所蔵する図書資料の中から今回の授業の目的にかなうと思われる浮世絵鑑賞の入門書を複数選んで資料として提供した。それらをふまえて、今度は教師側が授業で活用できそうな部分を選び、中学生の関心に引き寄せ、彼らが理解できる・興味を持てる言葉と形式を選んでプレゼンテーション資料を作成した。資料の作成は、授業者だけでなく、連携グループに所属する教師が協力して行った。

今回の授業は、二つの研究仮説に基づき実施された。①データベースを利用して多くの作品に触れることにより、千葉市美術館や浮世絵に興味を持つこと

ができるであろう。②浮世絵についての知識を持つて鑑賞することで、読み解くおもしろさに気づくであろう。①に関しては、特定の作家の作品を点ではなく複数比較することで、表現上の特徴や様式を整理しながら観てゆくことと、それによる気づきが期待された。②に関しては、中学生ならではの課題として、視点の設定と知識がどの程度有効なのか、関心が寄せられた。

なお、実際に授業で利用したデータベースは、平成二二年度当時のものである。この授業はデータベース(パイロット版)のモニタリングとしても位置づけられた。

授業者による実践に先立ち、連携グループ内で授業内容を検討し、授業を行う教諭が四時間分の指導案にまとめた。以下、授業の流れを簡単に追ってゆく。

一時間目 浮世絵とはどんなものであるか知る。

二時間目 美術館所蔵の浮世絵の中から一点紹介したい作品を選ぶ。

三時間目 選んだ作品の作者について調べ、作品について感じたことをまとめる。

四時間目 班で決めて調べた作品を発表する。

(1)鑑賞の前段階「浮世絵とは何か?」／一時間目

——作品が生徒にあまり馴染みのない「浮世絵」のため、事前に「浮世絵とは何か」「どのような種類があるか」「浮世絵の果たした役割は」など、鑑賞の切り口、入口になるような学習をし、それをふまえたうえで作品選びができるようにした。このことによって、生徒が浮世絵に関する知識を深め、作品から情報を読み取り鑑賞していけば、より深い学習ができるのではないかと考えた^{註20}。

この仮説に基づき、初回の授業は用意された。浮世絵について学習するプレゼンテーション資料の作成には、連携グループ内で作業分担をし、必要に応じて自校の生徒で実験をしながら改良を重ねている。今回の授業者である阿部教諭の授業は、中学校三年生を対象に行われた。美術の時間を計四時間使う予定だったが、結局は六時間かかった。全体としては、時間がかかりすぎたかもしれない。もっとポイントをおさえて進められれば良かったとの意見も聞かれた。

一時間目は、連携グループで事前に用意したプレゼンテーション資料「浮世絵—江戸時代のマルチメディア」(パワーポイント)を用いて教師が説明をした。ここではまず、浮世絵は美術館のガラスケースや額の中に飾られている江戸時代の絵ではないとし、市井の人々が暮らしを楽しんだり、情報を得るためのものであったことを紹介した。さらには、ジャンルとして、美人画・役者絵・武者絵・相撲絵・死絵・化物絵・おもちゃ絵などがあることを示した。これらのジャンル紹介には、当然ながら、当館のコレクションの特徴が影響している。その後、五〜六人ごとに班を作り、鑑賞する作家(絵師)を振り分けた。実際にグループで活動する前に、一人一人が気に入った作品を選び、その際、その作品が浮世絵としてどのような働きをしていたのかを考えさせた。

(2)個人とグループの鑑賞／二時間目

一クラス二九人を六グループ(五人ずつ)に分けた。鑑賞対象は、あらかじめデータベースの「代表絵師」^(註21)の中から六人を選び各グループに割り当てた。六人の選定基準として、検索対象となるデータベース上の作品数や資料の多寡になるべく偏りが出ないよう配慮した。たとえば、溪斎英泉二八四点など、例外的に点数が多いものは除いた。美術館の所蔵の範囲内での選択となるため、

必然的に、世間一般の知名度や出版資料の多寡とはやや異なってくる。

グループごとの割り当ては次のとおり。

グループ一 喜多川歌麿(一五点)、グループ二 鈴木春信(一五点/版本を除く)、グループ三 歌川国貞(二七点/当時)、グループ四 葛飾北斎(五〇点)、グループ五 歌川国芳(三一点/当時)、グループ六 歌川豊国(二〇点)

* (一)内は画像付きの作品点数

まずは所属するグループに割り当てられた絵師の作品の中から五人(もしくは四人)が一点ずつ自分が紹介したい作品を選ぶ。次に、五点ないしは四点持ち寄った中から、グループ全体で紹介する作品を一点選ぶ。話し合い、グループ内でプレゼンテーションをして決定する。

今回の授業に参加した生徒たちは、二年次・三年次の夏休みに、それぞれ課題として美術館へ足を運んでいる。また、二年次には、千葉市美術館の所蔵品の中から九〇点あまりの作品を使った鑑賞授業に取り組んでいる^(註22)。この鑑賞授業は二年生向けの内容で、初回の成果をもとに授業者自身の手によって改良されたと思われる。美術への関心・意欲・態度として、「作品の良さや美しさを鑑賞する喜びを味わうこと」「地域の美術館の所蔵作品を鑑賞することで、郷土の美術や文化に対する理解と愛情を深めること」といったねらいに加え、鑑賞の能力、つまり、「グループでの鑑賞を通して、自分の考えを発表したり、自分の価値意識をもって批評したりすることで、作品から受ける印象を感じ取ったり思考すること」を身につけることを目標としていた。二年次のこのような体験が、今回の授業の前半部分(自分の意見とグループ内の意見の違いを受け入れつつ、調整しまとめてゆく作業)で役に立ったようである。

(3)選んだ作品について調べ、作品について感じたことをまとめる/三時間目(実際には、三、四時間目)

なぜその作品を選んだのか、面白さ、興味を持った理由を探ってゆく作業である。ワークシートを利用しながらすすめられた。割り当てられた作家については、一つの作品に絞らず、データベース上で他の作品と比較しながら鑑賞する。それによって、共通点や特徴などがあらわになる。さらには同じ主題を他の作家がどのように表現したか、データベース上で比較することもできた。

(4)班で決めた作品を発表する/四時間目(実際には五、六時間目)

プレゼンテーション資料はパワーポイントで作成され、グループごとに教室前方の大型モニターの横に並んで発表した。割り当てられた作家について、選んだ作品を理由とともに紹介した。その際、その作品が同時代社会でどのような意味を持っていたのかを、一時間目の学習に基づき考察した。

六、評価

授業後、参加生徒の感想をとりまとめた授業者からは次のような報告があった^(註23)。

・今までの鑑賞では、生徒各自の「好きと思った」「良いと感じた」といった感覚的なものを手がかりとしていたが、今回、「浮世絵はどういうものか」「どのような働きがあるか」という授業を行ってから鑑賞したので、作品から様々な情報を読み取ることができ、より深い鑑賞ができた。

・浮世絵の働きを知ることにより、浮世絵の見方が変わった、興味を持ったな

どの生徒の感想が多かった。

- ・今回は実際の作品を鑑賞したわけではないが、作品に興味を持ち、今後実物を観る機会があったときにそれが生かされて来ると思われる。
- ・生徒たちの市美術館への親しみが増したようだ。

また、連携グループの中からはデータベースの改良を中心に、次のような意見があがった。

- ・画像の無いものが多い。せめて、画像のあるものと無いものを分けて表示できると良い。
- ・タグ、キーワード検索ができれば良い。「風景」「美人」など。
- ・ふりがなと作品解説を入れてほしい。
- ・図書館くらい使い勝手の良いシステムだと良い。

連携グループ以外からは、次のような意見が寄せられた^(註24)。

- ・作者もテーマもしばれたからこそまでできたと思う。発表の仕方、ワークシートをもう少し整理できたら良いかもしれない。
- ・教材として浮世絵をどう扱えば良いかヒントになった。
- ・難しい言葉、言い回し等、調べて出て来た解説でわからないこと、疑問、発見にぶつかったとき、ひとつずつ解決していったのは良かった。
- ・「浮世絵Ⅱきれいだねだの古い版画」という認識だったが、メディアアとしての役割を知ることができ興味が増した。導入、切り口が良かったと思う。

- ・発表の仕方には工夫と指導の余地がある。
- ・思考のつながり、興味関心の広がりを見せるようなプリントを、はじめて鑑賞に取り組む教師向けに用意したい。

- ・思考力を身につけることができる。

- ・市内のすべての学校で気軽に使えるワークシートがあると良い。
- ・今回の研究授業を通して、参加教員が浮世絵に興味を持てるようになったことも収穫である。

データベースの充実については、今後、画像の順次追加と、既存の作品解説文を入れ込むことを検討している。キーワード検索については、システムの問題があるが、利便性を考えるとこれも検討したい。作家や作品に偏りがあるのは、画集等複製による教材と美術館のコレクションの大きな相違点といえるだろう。ここにあるものが全てではない、という前提は、いずれにしても心にとめておきたいことである。このことは、一般的な美術館のコレクションの特質として利用者の理解を求める必要がある。だが同時に、鑑賞対象作品の幅を狭めることは、鑑賞初心者向けにはある程度必要で、効率的な学習のためにもメリットと考えられるのではないだろうか。

また、作品一点だけではなく、同じ作家や同種の作品を一定量平行して観てゆくことによって、様式や決まりごとを整理しながら観る姿勢が養われる。これは目録(図録)ではなく検索システムを使うこと、データベース活用のメリットといえるだろう。

鑑賞にあたる視点・知識の用意は、美術館では一般向けギャラリートークとして実践しており、その効果も実証されている。ただし、視点や知識の提供は、あくまでも鑑賞対象の作品へと再び目を向けさせるしくみでなければならぬ。このことは、ギャラリートークの課題でもあるが、過分の、あるいは不適切な知識の提供は、鑑賞者を作品から引き離してしまう。作品鑑賞を二の次にした調べ学習になりかねないというリスクは常にあるだろう。

稿者の立場としては、あくまでも画像という複製で鑑賞を完結させたくない

というのが本心である。だが、中学生はこれから鑑賞に取り組む年代にあり、今後の鑑賞につながる素地を整えるという意味でも今回のような授業は進めたい。鑑賞能力は発達段階に応じたプログラムを用意して鍛えることで、少しずつ向上し、やがて身につくものではないだろうか。

今後は、実際の展示と連動した授業の進め方や、データベースの活用方法についても考えてゆきたい。

註1 後述の独立行政法人国立美術館「所蔵作品目録検索システム」や、博物館・美術館における資料情報システムと複数の館での情報共有のための基盤として、東京国立博物館が中心となつて二〇〇五年に開発した「ミュージアム資料情報構造化モデル」など。参考文献として、村田良二「東京国立博物館の収蔵品管理システム」『アート・ドキュメンテーション研究』(16)二〇〇九年、p.11-20

註2 発表者 千葉市立大宮中学校阿部真紀教諭。稿者は助言者として登壇した。

註3 山根佳奈「学校との連携事業に関する考察」千葉市美術館での実践をふまえて『千葉市美術館研究紀要採蓮』第八号(二〇〇五年)、p.38-41

註4 全ての教員が何らかの部会に属し、例会は勤務時間内に開催される。

註5 市立中学校の二年生全員を対象とし、千葉市美術館の所蔵作品の中から九〇点あまりを選び、スライド等を用いて画像で鑑賞する授業。市教育研究会を通して市立中学校五七校に呼びかけ、五四校(次年度初めに実施した一校を含む)が参加した。教室で鑑賞する作品は、中学生に親しみやすいテーマや美術館の収集方針をふまえ、画像での鑑賞であることなどの条件を加味して選定(教室ではスライドやカードでの鑑賞を前提としているため、原則として立体作品は除外した)。三つのコレクション分野について、房総ゆかりの作品では「行ってみよう・見てみたい千葉の風景」、近世近代の作品からは「ちよつと昔の美男・美女」、現代美術作品からは「人」をテーマに設定し、点数のバランスも考慮した。

註6 「学習者が主体的に学ぶ授業」――上野行一氏は、対話による鑑賞のねらいを、「美術作品にまつわる歴史や固有の情報を教えるのではなく、作品に対する自分の見方、感じ方や考え方を他者とコミュニケーションし、対話を通して個々の見方や価値意識を深めたり広げたりすること」としている。上野行一著「はじめに 対話による鑑賞の授業がめざすもの」『対話による鑑賞教育中学校美術教師のための実践ガイドブック』、光村図書出版株式会社、二〇一〇年、p.3

註7 同、p.7

註8 今回の事業にいたるまでの、美術館連携グループの八年間の活動内容は次のとおり。

平成一六年度 市教育研究会中学校造形部会内に「美術館との連携グループ」発足

平成一七年度 「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」広がる絵本世界」にあわせて市内六中学校の美術部の生徒が、絵本の制作・展示を通して交流

平成一八年度 国内の美術館と学校の連携事業について、先行事例を調査

平成一九年度 前年度の事例調査をまとめ、市内の美術科教職員向け資料『いつてみたい。美術館』を発行

平成二〇年度 市立中学校の二年生を対象とし、千葉市美術館の所蔵作品の中から九〇点あまりを選び、スライド等を用いて画像で鑑賞する授業を実施

平成二一年度 前年度の鑑賞授業の成果を反映させた所蔵作品展「こんな作品あったよ」を美術館で実施

平成二二年度 千葉市立大宮中学校にて千葉市美術館の作品検索システム「浮世絵データベース」を利用した鑑賞授業を展開

平成二三年度 「第五一回関東・信越・静地区造形教育研究大会」で研究発表

*調査対象館は一七館。調査・報告はグループメンバー二名が担当。発行『千葉市教育研究会中学校造形部会 美術館連携グループ/平成一九年六月

*会期 平成二一年六月二七日～八月九日

註9 学年規模が大きいにもかかわらず、教員が専科科目を受け持つためクラスごとに分散した来館が難しいということ。

註10 室屋泰三「作品情報の発信とアクセス」『美術情報・資料の活用―展覧会カタログから』まで『全国美術館会議情報・資料研究部会』二〇一一年

註11 事前にiPhoneまたはiPadの端末にダウンロードし、国立西洋美術館の常設展示室で実際の作品を目の前にしながら鑑賞ガイドとして利用するためのアプリケーション。同館は二〇〇七・二〇〇八年度にわたり文化庁から受託して「美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化にかかる調査研究」に取り組んでいる。監修『国立西洋美術館 制作』NHKエデュケーション。

註12 前掲書 p.26

註13 <http://search.artmuseum.go.jp/>

註14 <http://db.amgdata.ac.jp/> (公開状況は二〇一二年六月現在)

註15 http://www.tnm.jp/modules/r_collection?controller=top

註16 <http://www.emuseum.jp/>

註17 iPhone版が二〇一一年一月二〇日リリースされた。学校の授業でも活用してほしいとのこと。

註18 二〇一一年二月よりインターネットを通じてサービスが始まったGoogle社(アメリカ)の「Google アートプロジェクト」は、世界各国の美術館の名品・優品を検索し、高解像度画像で閲覧できるものであるが、本稿執筆中の二〇一二年四月より規模が拡大し、新たに日本からも東京国立博物館をはじめとする六館が加わった。外部組織との連携による所蔵品情報の公開の一例として挙げておきたい。

<http://www.googleartproject.com/>

註19 千葉市美術館の所蔵品数は一、七二二件（平成三三年度三月末日現在）であるが、管理用データベースでは点数で登録している。

註20 『第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会』レジュメより、五、実践内容（1）題材について

註21 浮世絵データベース「作家で探す」の項を参照。

註22 鑑賞プログラム「こんな作品あったよ」は、当初平成二〇年度に当時の市立中学校の二年生を対象に一斉授業を実施した。一斉実施以降も授業を行うかどうかは、各教師に委ねられている。

註23 授業で使ったワークシートにアンケートを盛り込み、終了後に生徒から回収し、阿部教諭が集計したもの。

註24 『第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会』研究発表後の質疑応答より抜粋。

Project Report: An Experiment in Teaching Visual Appreciation through the Use of an Art Museum's Collection Database

Kana Yamane

This article reports on a project jointly undertaken by the CCMA and middle schools within Chiba city that experimented with providing classroom access via the Internet to the CCMA Collection Database (system for searching CCMA collection list with visual images). Advances are being made in making museum information, specifically databases or similar tools introducing art works, available to a broad spectrum of end-users, from researchers to the general public. These systems are being developed and organized in a variety of formats, including search engines to access textual data, as well as the viewing of high-resolution images.

Discussions regarding how to create effective systems are flourishing, primarily within the field of museum information systems management. This article focuses on one application and the use of museum information systems in an educational setting.

This particular experiment was a joint research project developed by a team made up of CCMA staff members and middle school art teachers who are part of the Middle Schools Arts Subcommittee working group of the Chiba City Education Research Committee. It utilized the CCMA Ukiyoe Works Database (total 2,121 items, of which 1,596 items have images). Curriculum plans were proposed and student worksheets developed. In my role as a museum educator, I prepared resources explaining art media, materials and formats along with tools for teaching visual appreciation.

When reproductions of art works are used in classrooms as part of visual appreciation training, there is no opportunity for participants to personally experience the actual art work or to truly appreciate the actual materials and their specific qualities. Thus, would it not more meaningful to simply teach the skills for critical art appreciation, namely learning how to learn visually and organize the information they gain in that process, so that participants can carry those skills with them to their next personal encounter with actual art works. Given this premise, the focus of this experiment was placed on learning how to read and interpret an art work on the basis of secondary materials and information. This meant that participants were shown how to find hints within a picture to start their viewing experience and then enjoy the art work through learning how to read and interpret those clues. Using that learned critical appreciation of a first art work, the participant can use the database to expand their field of inquiry to related works, whether in terms of artist, period or subject matter. By observing art works via a single facet, such by the same artist or of the same type, the viewer can learn to organize their thoughts about style and standard ukiyoe iconographic conventions, and thus develop their ability to critically view, understand and appreciate. This method for investigating art works is particularly effective for art works such as ukiyoe prints, which are themselves rich troves of information on a range of subjects.

Once knowledge and a method of looking has been given to viewers, there is no avoiding the fact that then the viewer must turn once again to look at the art work under consideration. If excessive or inappropriate information is given, there is the risk that a viewer will turn away from the art work and it will become simply a case of rote learning or appreciation. However, this experiment confirmed the value of focusing on the process of training middle school students to gradually look more closely and deeply at art works and thus hone their critical abilities. The provision of appropriate knowledge, viewpoint and starting points for their viewing experience was an effective means of encouraging their interest in visual appreciation. Thus this study will contribute important information for the future consideration of this issue.

(Translated by Martha J. McClintock)

平成二三年度 千葉市美術館の活動

一 展覧会

(一) 企画展(七件)

二〇一一年四月二十六日(土)～六月五日(日) 八階展示室

「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」

* 錦絵が最も成熟した浮世絵の「黄金時代」に焦点を当て、優れた浮世絵コレクションを誇るボストン美術館の所蔵品から、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽を中心に展覧。全一三六点。

(四日間／入場者数一八、二六八人)



チラシ



「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」会場

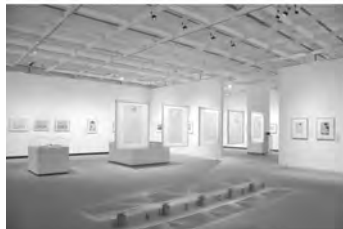
六月一四日(火)～七月三日(日) 七・八階展示室
「生誕一三〇年 橋口五葉展」

* 生誕一三〇年と没後九〇年を記念し、橋口五葉(一八八一～一九二二)の全貌を改めて探る回顧展。油彩、水彩、素描、版画、絵葉書、装幀本など四〇〇余点により、明治の末から大正期を駆け抜けて早世した画人の、独自の美意識を検証する。

(四七日間／入場者数二〇、九二二人)



チラシ



「生誕130年 橋口五葉展」会場

六月二一日(火)～七月三日(日) 九階市民ギャラリー
「千葉市美術協会特別展『秀作展二〇一一』」

(二日間／入場者数一、〇四七人)

八月九日(火)～一〇月二日(日) 八階展示室

「浅川巧生誕二二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」

＊卓抜した鑑賞眼と研究により「朝鮮陶磁の神様」と呼ばれ、晩年は稲毛・黒砂に居暮らしした浅川伯教(一八八四～一九六四)と、誠実な人生が今もなお多くの人を惹きつける巧(一八九一～一九三二)という兄弟とゆかりのある陶磁器を中心に、朝鮮時代の美と近代日本の美意識との関連を紹介する。

(五四日間／入場者数一〇、二〇七人)



ナラシ



「浅川巧生誕 120 年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」 展会場

一〇月一〇日(月・祝)～一二月三日(日) 七・八階展示室
「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」

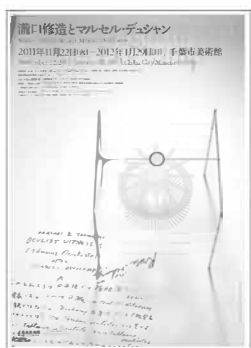
＊江戸時代の風流公子・酒井抱一(一七六〇～一八二八)の生誕二五〇年を記念し、宗達・光琳につづく琳派の第三の巨匠として近年脚光を浴びる抱一と以後百年続く江戸琳派の系譜を、計三三八点の作品により総合的に展観する。

(二三日間／入場者数三四、四四九人)

一二月三日(火)～二〇二二年一月二九日(日) 七・八階展示室
「瀧口修造とマルセル・デュシャン」

＊美術評論家としても活躍した詩人瀧口修造(一九〇三～一九七九)と二〇世紀美術の巨匠マルセル・デュシャン(一八八七～一九六八)の交流を、二人の作品や資料、関連作家の作品により跡づけ、瀧口のデュシャン紹介が日本の美術界にもたらした影響を探る。

(六二日間／入場者数七、七三八人)



ナラシ



「瀧口修造とマルセル・デュシャン」 展会場



ナラシ



「生誕 250 年記念 酒井抱一と江戸琳派の全貌」 展会場

三月三日(土)～三月二三日(金)

一階さや堂ホール、七・八階展示室、九階市民ギャラリー、一一階講堂

「第四三回千葉市民美術展覧会」

* 第四一回千葉市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品約千点を七部門に分けて展示。

(二〇日間／入場者数一五、三二五人)



「第43回千葉市民美術展覧会」会場

(二) 所蔵品を中心としたテーマ展(六件)

二〇一一年四月二六日(火)～六月五日(日) 七階展示室

「岡本秋暉とその師友」

* 岡本秋暉(一八〇七～六二)は、中国人画家沈南蘋の画風を学んで、鳥、特に孔雀を得意とした。「一 江戸の南蘋派」「二 岡本秋暉」「三 谷文晁から鈴木鷺湖へ」の三部構成により、岡本秋暉とその師友の作品を展示。

※平成三年三月二日に発生した東日本大震災の影響により、会期の始まりを当初予定した四月九日から、二六日に変更しました。

(四一日間／入場者数二一、八九九人)



「ドローイングの楽しみ」展会場

六月一四日(火)～七月三一日(日) 七階展示室
「ドローイングの楽しみ」

* 企画展「生誕二三〇年 橋口五葉展」にちなみ線描の美しさ、おもしろさを魅力とする作品を展示。(四七日間／入場者数一〇、七九四人)



チラシ



「岡本秋暉とその師友」展会場

八月九日(火)～一〇月二日(日) 七階展示室

「棟方・富本・リーチー近代日本の版画を中心に」

*棟方志功 富本憲吉、バーナード・リーチを中心とした版画作品を展示。
(五四日間／入場者数一〇、九五二人)



「棟方・富本・リーチー近代日本の版画を中心に」 展会場

八月九日(火)～一四日(日) 九階市民ギャラリー

「千葉大学普遍教育教養展開科目『展示をつくるA』『博物館実習B』 企画展示

ゆめうつつー目を閉じて、目を開けて」

*千葉大学の授業「展示をつくるA」「博物館実習B」のなかで、学生参加により企画された展覧会。本年は美術館のコレクションから「夢」を連想させる作品を選び展示。

(六日間／入場者三二〇人)



チラシ

一二月三日(火)～二〇一二年一月二九日(日) 七階展示室

「実験工房の作家たち」

*「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展に合わせ、当該年度に結成六〇周年を迎えるゆかりのグループを紹介。

(六二日間／入場者七、四一八人)



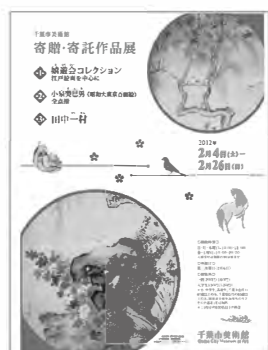
「実験工房の作家たち」 展会場

二月四日(土)～二月二六日(日) 七・八階展示室

「寄贈・寄託作品展」

*近年の寄贈・寄託作品を紹介。特に次の三つの特集を立てた。「嬉遊会コレクションー江戸絵画を中心に」「小泉舜巳男《昭和東京百図絵》全点揃」「田中一村」

(二二日間／入場者数四、七五四人)



チラシ



「寄贈・寄託作品展」会場

二 講演会等展覧会関連イベント(二五件)

講師等の所属先はイベント開催時のものを記載。

①「記念講演会 葛屋重三郎と歌麿・写楽」

二〇一一年五月一日(日) 一階講堂 (参加者一〇三人)

講師 田沢裕賀(東京国立博物館 絵画・彫刻室長)

②「記念講演会 ポストン美術館と浮世絵」

五月七日(土) 一階講堂(参加者九八人)

講師 小林忠(当館館長)

③「記念講演会 寛政年間浮世絵界絵図」

五月一五日(日) 一階講堂 (参加者九八人)

講師 大久保純一(国立歴史民俗博物館教授)

④「ポストン ジャズナイト@レストランかぼちゃわいん」

六月三日(金) 一階レストランかぼちゃわいん(参加者三八人)

出演 徳田雄一郎(sax & vo)、山田貴子(piano)、三浦トオル(bass)、長谷川ガク(drums)

⑤「記念講演会 新・橋口五葉譚」

七月二〇日(日) 一階講堂 (参加者一九一人)

講師 岩切信一郎(美術史家)

⑥「記念講演会 浅川兄弟と『李朝』のやきもの」

八月二七日(土) 一階講堂 (参加者一八三人)

講師 片山まび(東京藝術大学美術学部芸術学科准教授)

⑦「記念講演会 近代日本の朝鮮陶磁―浅川伯教・青山二郎・安宅英一を中心―」

九月三日(土) 一階講堂 (参加者一九七人)

講師 森孝一(日本陶磁協会事務局長)

⑧オープニングトーク

第一話「抱一に魅せられて―細見コレクションと江戸琳派」

第二話「酒井抱一の大回顧展に寄せて」

一〇月一〇日(月・祝) 一階講堂 (参加者二三〇人)

講師 第一話 細見良行(細見美術館館長)

第二話 岡野智子(細見美術館上席研究員)

⑨「記念講演会 酒井抱一の雅俗」

一〇月一六日(土) 一階講堂 (参加者二〇〇人)

講師 小林忠(当館館長)

⑩「記念講演会 鬼才・鈴木其一の魅力」

一〇月二三日(日) 一階講堂 (参加者一九四人)

講師 河野元昭(秋田県立近代美術館館長)

⑪「記念講演会 酒井抱一と下谷」

一〇月三〇日(日) 一階講堂 (参加者一七九人)

講師 河合正朝(慶應義塾大学名誉教授)

⑫「高橋アキ・ピアノ・リサイタル ケージ・武満・実験工房」

二月三日(土) 一階さや堂ホール (参加者一五六人)

⑬「展覧会 瀧口修造の光跡Ⅲ『百の眼の物語』」

二月六日(火)～二月二五日(日) 九階市民ギャラリー
(入場者数八四五人)

⑭「記念講演会 瀧口修造とマルセル・デュシャン」

二月二一日(日) 一一階講堂 (参加者一九六人)
講師 巖谷國士(明治学院大学名誉教授)

⑮「映画上映会 死なない子供、荒川修作」

二〇二二年一月一五日(日) 一一階講堂 (参加者八〇人)
ゲスト 山岡信貴

三 市民美術講座・学芸員出前講座等(一三回)

(一)コレクション理解のための市民美術講座(九回)

第一回 二〇二二年五月二一日(土) 一一階講堂 (参加者四六六人)
「岡本秋暉と花鳥画」 講師 伊藤紫織(当館学芸員)

第二回 六月二五日(土) 一一階講堂 (参加者計八九人)

「橋口五葉が追い求めた女性像」 講師 西山純子(当館学芸員)

第三回 七月一六日(土) 一一階講堂 (参加者一三九人)

「橋口五葉と浮世絵」 講師 小林忠(当館館長)

第四回 八月二〇日(土) 一一階講堂 (参加者六〇人)

「昭和陶芸の古典復興」 講師 藁科英也(当館学芸係長)

第五回 九月一七日(土) 一一階講堂 (参加者七〇人)

「棟方志功と民藝運動」 講師 西山純子(当館学芸員)

第六回 一一月六日(土) 一一階講堂 (参加者二〇三人)

「酒井抱一と江戸琳派」新出資料紹介を中心に」 講師 松尾知子(当館学芸員)

第七回 一二月一七日(土) 一一階講堂 (参加者五九人)

「一九二三年以降のマルセル・デュシャン」 講師 水沼啓和(当館学芸員)

第八回 二〇二二年一月二一日(土) 一一階講堂 (参加者五七人)

「瀧口修造 二つの旅とデュシャン」 講師 水沼啓和(当館学芸員)

第九回 二月一八日(土) 一一階講堂 (参加者一六七人)

「田中一村」寄贈・寄託作品展より」 講師 松尾知子(当館学芸員)

(二) 学芸員出前講座等(四回)

二〇一一年八月二七日(土) 越谷市中央市民会館 (参加者一七一人)

「講演会 浮世絵師 東洲斎写楽」

講師 田辺昌子(当館学芸課長)

九月六日(火) 千葉市文化センター (参加者一〇〇人)

千葉市民文化大学芸術文化学科第二一回「日本人とやきもの・桃山、そして近代」

講師 藁科英也(当館学芸係長)

一〇月二二日(土) 鹿児島市立美術館 (参加者一二〇人)

「橋口五葉展 ギャラリートーク」

講師 西山純子(当館学芸員)

二〇一二年二月四日(土) 稲毛図書館 (参加者一八人)

「稲毛図書館美術講座 千葉市美術館『寄贈・寄託作品展』の見どころ」

講師 松尾知子(当館学芸員)

四 ワークショップ、その他イベント等

「中学生のためのギャラリートーク」11 生誕一三〇年 橋口五葉展」

七月二二日(金)、二三(土) 展示室 (参加者七〇人)

*セルフガイド「五葉さんって、どんな人？」 作成

「ファミリープログラム ドローイングのたのしみ」

七月二四日(日) 一二階講堂 (参加者九組一八人)

「デイリリーアートサーカス2011」

八月二八日(木) さや堂ホール／一階プロジェクトルーム (来場者合計一六六人)

*主催 DAILY ART CIRCUS 2011 実行委員会、共催 千葉市美術館

「木版画年賀状を作ろう」

一二月六日(日)、一三(日) 九階講座室 (参加者一八人／全二日間)

「パパとキッズのアートプログラム Part 3 世界でたった一つのポートレート with ノッポさん」

二〇一二年一月一四日(土) 一二階講堂 (参加者一九組三九人)

*主催 千葉市美術館／コスモ石油株式会社

「ぼくは、恐竜を飼うことにした」

三月一〇日(土) 千葉県立中央博物館 研修室(参加者二〇人)

*「科博コラボ・ミュージアム in 千葉」恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち」関連 千葉県立美術館との合同ワークショップ

五 学芸員によるギャラリートーク(九回)

「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」一回

「生誕一三〇年 橋口五葉展」一回

「浅川巧生誕一二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」三回

- 「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」 一回
- 「瀧口修造とマルセルデュシャン」 二回
- 「寄贈・寄託作品展」 一回

六 学校との連携事業

(一) 学校団体の受け入れ

① 「小中特別支援学校鑑賞教育推進事業」

* 遠隔校等の来館を促進するため、美術館が無料送迎バスを用意し鑑賞プログラムを提供。

- 「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」 三校 一九一人

- 「生誕一三〇年 橋口五葉展」 六校 三九一人

- 「浅川巧生誕一二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」 四校 二八四人

- 「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」 三校 二二六人

- 「瀧口修造とマルセル・デュシャン」 四校 二五六人

- 合計 二〇校 一、三三八人

② 児童・生徒の団体鑑賞

- 合計 五件(四校) 二二三二人

(二) 職場体験学習等の受け入れ

- ① 職場体験学習(市内中学校対象) 一八校 四七人

② 職場訪問等 一校 三人

(三) 「千葉市図工・美術科担当等教職員鑑賞一日研修」

- 八月一〇日(水)(参加者三九人)

(四) 千葉市教育研究会造形部会 美術館連携グループとの連携

* 浮世絵データベースを使った授業についての共同研究、発表

(五) その他

教職員等による研修利用

- 一件 一八人

七 アウトリーチプログラム

* 千葉大学や教育機関、地域NPOとの連携事業である「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WICAN)」を実施。そのうち千葉市美術館を会場に行われたイベントのみを記載。詳細は報告書を参照。

© WICAN 2011 「アートからはじめる学校プロジェクト ランチルーム編」
「トーク&レポート」 一月二三日(日) 一一階講堂(参加者六八人)

W i C A N 2011 展示 一月二日(日)、二月五日(日) 一階プロジェクトルーム

八 ボランティア活動

* 今年度は第三期メンバーが加わり、二八人が登録。

(一) ギャラリートーク

* 会期中毎水曜日に行う定例ギャラリートークに加え、各ボランティアが自主的に行うギャラリートークも不定期に実施。

「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」定例五回、自主一〇回

「生誕一三〇年 橋口五葉展」定例六回、自主七回

「浅川巧生誕一二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」定例七回、自主五回

「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」定例四回、自主五回

「瀧口修造とマルセル・デュシャン」定例九回

「寄贈・寄託作品展」自主四回

合計 定例三二回、自主三二回

(二) 鑑賞リーダー

* 「小中特別支援学校鑑賞教育推進事業(六―)(一)①」等への協力活動。学校側の希望に応じて、少人数グループでの鑑賞を行う。対応したボランティアのべ人数を記録。

「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽」 五回
三二人

「生誕一三〇年 橋口五葉展」 一〇回 六五人

「浅川巧生誕一二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美」 七回
四三人

「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」 四回 三〇人

「瀧口修造とマルセル・デュシャン」 五回 三六人

「中学生のためのギャラリークルーズ 生誕一三〇年 橋口五葉展」 二日間
一九人

合計三三回 一二五人が活動

(三) ワークショップ等

○木版多色摺り体験

「江戸を摺る！」五月二日(日) 一階プロジェクトルーム

「まなびフェスタ2011」二月三日(土) 千葉市生涯学習センター

「総合展ワークショップ」一月二九日(日) 一階エントランス

「ヤングフェスティバル」一月二九日(日) 千葉県青少年女性会館

○美術館までナビゲート(美ナビ)

五月二五日(日)、七月一〇日(日)、九月三日(土)、一〇月一〇日(月・祝)、一

二月一日(日)

○その他

「『江戸を遊ぶ』」プラ板でつくる浮世絵ストラップ」五月五日(木・祝) 一階
講堂

「読書まつり」一〇月二二日(土) 千葉市生涯学習センター

九 出版活動

(二) 展覧会図録(五冊)

『ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代―清長、歌麿、写楽』
編集 岩切友里子・日本経済新聞社文化事業部 発行 日本経済新聞社



『生誕一三〇年 橋口五葉展』
発行 東京新聞



『浅川巧生誕一二〇年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美』
編集 大阪市立東洋陶磁美術館他 発行 美術館連絡協議会



『酒井抱一と江戸琳派の全貌』
発行 株式会社求龍堂



『瀧口修造とマルセル・デュシャン』
編集 千葉市美術館 発行 千葉市美術館



(二) 展覧会の作品目録

*企画展・所蔵作品展ごとに、作品目録を発行。

(三) 定期刊行物

①美術館ニュース『C'n』第五八一六一号(四回発行)

②千葉アートネットワーク・プロジェクト二〇一ドキュメント

一〇 ホームページの公開

(二) ホームページ

訪問者総数 三五四、五五七セッション

閲覧ページ総数 一、二二三、九九〇ページ

(二〇一二年三月二日まで、二〇一二年一〜三月の一部のデータ取得できず)

(二) 携帯電話用ホームページ

閲覧ページ総数 六九、六七六ページ

(二〇一二年三月二日まで)

一一 作品の収集

(一) 寄贈 四四件

濱田清治《廣東沖ニテ 支那魚舟》

(濱田文治氏寄贈)

鈴木雄吉《欲望》、《毀れた日々》、《マダム・ローズ》、《布》、《スケッチブック》

(以上鈴木袈津子氏寄贈)

狩野派《(狩野派資料一括)》

(狩野静子氏寄贈)

池大雅《溪行放情図・富嶽春景図・李白詩意図》、《臨伊予九山水図》、《仿禪月朱衣達磨像》、《曲江歎乃図》、《擬丹丘翁山水》、池玉瀾《山水》、歙形蕙齋《東都繁盛図卷》、浦上玉堂《和風解纜》、《蓮峰雪花図》、《書》、田能村竹田《桂菊

同瓶》、《米点山水》、《歲寒二雅図》、《寒江短棹図》、高橋草坪《花鳥図》、立原杏所《夏景山水》、岡本秋暉《花鳥図》、渡辺華山《佐藤一斎像画稿五点》、《倣張秋谷水墨山水》、《佐藤信全之像》、伝渡辺華山《益軒先生像》、伝与謝蕪村《駅路図》、伝岡田米山人《山水図》、伝酒井抱一《しだれ桜》、伝椿椿山《秋花野鶴》、《柏樹鳴鹿》、田能村直入《書画》、野口幽谷《牡丹》、伝狩野芳崖《山間水亭》、伝橋本雅邦《畔路帰牧》、伝富岡鉄斎《羅漢渡海》、《蓬萊仙洲図》、《天保九如》、《鶴》、高橋泥舟《書（人の一生は……）》、王一亭《双鶴図》
(以上ミツワ株式会社寄贈)

笹島喜平《四谷風景》

(森清涼子氏寄贈)

(二) 寄託

田中一村《清宵》他 計一〇件

一二 所蔵作品の修復・保存等

(一) 修復

行木正義《藤色の諧調》

田中一村《松図》

田中一村《瓢箪図》

(二) 所蔵作品のマット装

平塚運一寄託作品他 計一二八点

(三) 写真撮影

溪斎英泉《青楼七軒人 大文字屋誰袖》他計二三四カット

一三 所蔵作品の貸出、特別利用等

(一) 作品の貸出(二七件一七二点)

※平成三三年度開催展について記載

①「開館五〇周年記念特別展Ⅰ 女性像の系譜―松浦屏風から歌麿まで―」(大和文華館、二〇一一年四月―五月)

無款《犬を連れた禿図》他 一一点

②「香り かぐわしき名宝」(東京藝術大学大学美術館、二〇一一年四月―五月)

鎚木清方《薰風》他 九点

③「村上友晴展」(京都精華大学ギャラリーフロール、二〇一一年四月―五月)

村上友晴《無題》他 二点

④「生誕一〇〇年 川端実展」(横須賀美術館、二〇一一年四月―七月)

川端実《祭り》 一点

⑤「特別展 写楽」(東京国立博物館、二〇一一年五月―六月)
桑楊庵撰『春の色』 一点

⑥「町奉行与力の風流な生活―橘千蔭の場合―」(昭和女子大学光葉博物館、二〇一一年五月―六月)
北尾政演『吉原傾城新美人合自筆鏡』 一点

⑦「Yayoi Kusama」(レイナ・ソフィア美術館他、二〇一一年五月―二〇一二年九月)

草間彌生《No.B White》他 四点

⑧「不滅のシンボル 鳳凰と獅子」(サントリー美術館、二〇一一年六月―七月)
小林清親《獅子図》他 三点(寄託作品二点を含む)

⑨「江戸版画の色彩展―浮世絵から若冲まで―」(城西国際大学水田美術館、二〇一一年六月―七月)

鈴木春信《坐鋪八景 台子の夜雨(初版)》他 六点

⑩「菊畑茂久馬回顧展」(福岡市美術館、二〇一一年七月―八月)
菊畑茂久馬《ルーレット》他 五点

⑪「田中敦子―アート・オブ・コネクティング」(アイコンギャラリー他、二〇一一年七月―二〇一二年五月)

田中敦子《金のWork A》他 二点

⑫「生誕一三〇年 橋口五葉展」(北九州市立美術館分館他、二〇一一年八月―十一月)

『平旦』二号他 五〇点(寄託作品三二点を含む)

⑬「生誕二五〇年記念 酒井抱一と江戸琳派の全貌」(姫路市立美術館、二〇一一年八月―一〇月)

北尾政演『吾妻曲狂歌文庫』他 二二点(寄託作品一点を含む)

⑭「美の軌跡―デューラーから中村彝まで 前川誠郎の美学」(新潟県立近代美術館、二〇一一年九月―一〇月)

葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》他 五点

⑮「トリック&ユーモア展」(横須賀美術館、二〇一一年九月―十一月)
高松次郎《赤ん坊の影 No.387》他 二点

⑯「平成の大改修落成記念 斎藤氏と聖天堂展」(熊谷市立熊谷図書館、二〇一一年一〇月―十一月)

無款《木曾義仲合戦図屏風》 一点

⑰「特別展 千葉市の教育」(千葉市立郷土博物館、二〇一一年一月―二〇一二年一月)

葛飾応為『女重宝記』他 七点

⑮「関主税展」〔千葉県立美術館、二〇一一年一月―二〇一二年一月〕
関主税《刻》他 二点

⑯「開館三〇周年記念特別展 渋谷ユートピア1900―1945」〔渋谷区立
松濤美術館、二〇一一年二月―二〇一二年一月〕
前川千帆《新東京百景 渋谷百軒店》他 六点

⑰「石子順造の世界―美術発・マンガ經由・キッチン行」〔府中市美術館、二〇
一一年二月―二〇一二年二月〕
鈴木慶則《高橋由一風鮭》他 二点

⑱「特別展 平清盛」〔江戸東京博物館、二〇一二年一月―二月〕
無款《木曾義仲合戦図屏風》一点

⑲「元祿繚乱 師宣が描いた浮世」〔菱川師宣記念館、二〇一二年一月―二月〕
無款《寛文美人図》他 九点(すべて寄託作品)

⑳「特別展 再び! にゃんとも猫だらけ」〔平木浮世絵美術館UKIYO-e
TOKYO、二〇一二年一月―三月〕
歌川国利《ねこのうなぎや》他 一〇点(すべて寄託作品)

㉑「MOTコレクション 特集展示福島秀子」〔東京都現代美術館、二〇一二年
二月―五月〕
福島秀子《紅い風の反応》他 五点

㉒「變囀 ふたたび虹の彼方に」〔東京都現代美術館他、二〇一二年二月―二〇
一三年一月〕

變囀《若い仲間たち》他 二点

㉓「草月いけばな展 花のちからを信じて」〔大阪高島屋、二〇一二年三月〕
勅使河原蒼風《椿》他 二点(すべて寄託作品)

㉔「都市を描く―京都と江戸― 第II部 江戸名所と風俗画」〔国文学研究資料
館、二〇一二年三月―五月〕

歌川広重《目黒四季図》一点(寄託作品)

(二) 写真の貸出、撮影等(所蔵品の特別利用)

鳥居清長《美南十二候 九月(漁火)》他 計七八件一七八点

一四 友の会

会員 一、五四八人(二〇一二年三月三十一日現在)

一五 博物館実習

二〇一一年七月二三日、二五日―二九日
計 一八大学一九人

一六 図書室の運営

公開日数 三二七日

利用人数 一、五七九人

一七 施設の利用(利用日数)

市民ギャラリー 二五〇日(二八団体、一三、三六一人)

講堂 一八六日(一般七九日、美術館一〇七日)

講座室 二二三日(一般一四九日、美術館八四日)

さや堂ホール 一五〇日(一般一〇〇日、美術館五〇日)

一八 市民ギャラリーいなげ

(一) 特別企画展

二〇一一年八月九日(火)～八月二十四日(日)

「世界児童画展」

※財団法人美育文化との共催による「世界児童画展」の優秀作品と千葉県の子供たちの入賞作品を展示。

(六日間／入館者六四三人)

二〇一二年一月一七日(火)～一月二十九日(日)

「山口マオ～絵本とイラストレーションの世界～」

※絵本「わにわに」シリーズで人気の千葉県出身のイラストレーター・山口マオが手掛けた絵本原画やイラストレーションの数々を展示。

(二二日間／入館者一、五三三人)



「山口マオ～絵本とイラストレーションの世界～」
展会場

(二) 施設の利用者

展示室 一六、六六一人

制作室 九、三一七人

(三) 施設の公開(公開日数と見学者数)

「旧神谷伝兵衛稲毛別荘」 三〇九日 九、五二一人

「ゆかりの家・いなげ」 二九五日 六、六七七人

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
展覧会観覧者	ボストン美術館浮世絵名品展	1,536	12,943	3,789										18,268
	橋口五葉展			2,640	8,272									10,912
	浅川伯教・巧兄弟の心と眼					2,936	6,342	929						10,207
	酒井抱一と江戸琳派の全貌							17,451	16,998					34,449
	瀧口修造とマルセル・デュシャン								840	2,359	4,539			7,738
	第43回千葉市民美術展覧会												15,315	15,315
	岡本秋暉とその師友	1,209	9,186	2,504										12,899
	ドローイングの楽しみ			2,704	8,090									10,794
	棟方・富本・リーチ					3,516	6,489	947						10,952
	実験工房の作家たち								838	2,157	4,418			7,413
	寄贈・寄託作品展											4,754		4,754
展覧会観覧者 計		2,745	22,129	11,637	16,362	6,452	12,831	19,327	18,676	4,516	8,957	4,754	15,315	143,701
貸出施設利用者	市民ギャラリー	0	2,685	2,262	1,041	1,125	1,989	1,547	1,625	451	636	0	0	13,361
	講座室	47	460	225	385	244	380	365	272	362	353	61	326	3,480
	講堂	0	653	413	595	353	349	290	415	440	125	320	26	3,979
	さや堂ホール	5	590	160	717	1,325	486	102	358	535	173	742	0	5,193
貸出施設利用者 計		52	4,388	3,060	2,738	3,047	3,204	2,304	2,670	1,788	1,287	1,123	352	26,013
その他利用者	図書室	18	163	125	184	149	133	185	200	70	123	140	89	1,579
	講座・講演会等	0	432	89	400	291	267	803	241	1,100	137	167	0	3,927
	コンサート・ワークショップ等	0	66	38	18	486	0	0	18	156	258	0	0	1,040
	学校プログラム・実習等	0	191	23	403	36	292	216	261	176	83	0	0	1,681
その他利用者 計		18	852	275	1,005	962	692	1,204	720	1,502	601	307	89	8,227
美術館 利用者総計		2,815	27,369	14,972	20,105	10,461	16,727	22,835	22,066	7,806	10,845	6,184	15,756	177,941
市民ギャラリーいなげ	世界児童画展					643								643
	山口マオ										1,533			1,533
	展示室利用者	1,548	1,697	1,525	1,287	1,048	1,950	1,579	1,797	949	415	1,286	1,580	16,661
	制作室利用者	850	543	434	462	1,114	431	1,446	1,132	352	1,407	451	695	9,317
	旧神谷伝兵衛稲毛別荘	789	965	714	524	657	730	1,014	925	516	1,064	855	768	9,521
	ゆかりの家・いなげ	660	939	480	354	310	518	626	686	503	570	460	571	6,677
市民ギャラリーいなげ 利用者総計		3,847	4,144	3,153	2,627	3,772	3,629	4,665	4,540	2,320	4,989	3,052	3,614	44,352

(空欄は該当なし・利用不能を示す。)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十五号

二〇二二年七月三十一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

三〇―六七三 千葉市中央区中央三―十一―八
電話〇四三―二二―二三一一(代)

制作―印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.15

July 31, 2012

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X